

NetBackup™ リリースノート

リリース 11.2

NetBackup™ リリースノート

最終更新日: 2026-07-06

法的通知と登録商標

Copyright © 2026 Cohesity, Inc All rights reserved.

© 2026 Cohesity, Inc All Rights Reserved. Cohesity、Cohesity ロゴ、その他の Cohesity マークは、Cohesity, Inc の米国における、および/または国際的な商標です。ここで提供される情報は、Cohesity の機密情報および専有情報であり、(a) 意図された受信者により、(b) 有効なライセンスを受けた Cohesity ソフトウェアおよびサービスと共にのみ使用することができます。Cohesity ライセンスの条項については、www.cohesity.com/agreements を参照してください。

本書は、現状のままで提供されるものであり、その商品性、特定目的への適合性、または不侵害の暗黙的な保証を含む、明示的あるいは暗黙的な条件、表明、および保証はすべて免責されるものとします。ただし、これらの免責が法的に無効であるとされる場合を除きます。Cohesity およびその関連会社は、本書の提供、パフォーマンスまたは使用に関連する付随的または間接的損害に対して、一切責任を負わないものとします。本書に記載の情報は、予告なく変更される場合があります。

Cohesity サポート

Cohesity サポートへのお問い合わせ

Cohesity サポートケースを作成するには、いくつかの方法があります。

- [Cohesity サポート](#) に移動してベリタスのナレッジベースで検索するか、電話で問い合わせます (米国およびカナダ: 1-855-9CO-HESI (926-4374)、オプション 2)。
- [Cohesity サポートポータル](#) にログインして、新しいケースを作成します。
- Cohesity UI の (?) アイコンをクリックし、[サポートポータル (Support Portal)] を選択します。

サポートおよびサービスアシスタンス

最初に、サービスおよびサポートを契約したサービスプロバイダにお問い合わせください。Cohesity と直接連携している場合や、製品の保証や資格、修理の価格設定、またはテクニカルサポートに関連する質問がある場合は、以下のオプションを参照してください。

- 製品の問題に対するソリューションや、提案およびベストプラクティスを見つけるには、[Cohesity ナレッジベース](#) を参照してください。
- [Cohesity サポートポータル](#) にログインして、新しいケースを作成します。
- オープン中のケースを監視するには、ポータルにログインし、ホームページの[ケース (Cases)] タブをクリックします。このページには、すべてのケースの状態と更新が表示されるはずです。個々のケースの状態を表示することもできます。

パートナーのハードウェアで実行されている Cohesity ソフトウェア

認定されたサードパーティ製ハードウェアで動作する Cohesity ソフトウェアの場合、次のサポートワークフローが適用されます。

1. ハードウェアの問題であると判断できない場合は、まず **Cohesity** サポートにお問い合わせください。

メモ: Cohesity はパートナーのハードウェアの交換要求を処理できません。

2. **Cohesity** サポートは問題の優先順位を判断します。ソフトウェアの問題の場合、**Cohesity** サポートは引き続きこの問題に取り組みます。
3. ハードウェアまたはファームウェアの問題であるかその可能性がある場合、**Cohesity** は問題に関する情報をお客様に提供し、適切なパートナーに対するサポートチケットを発行するようお客様に依頼します。
4. **Cohesity** サポートは必要に応じて、パートナーとお客様との三者通話に参加できます。
5. お客様がパートナーのケースの進捗状況を **Cohesity** サポートに通知します。

目次

第 1 章	NetBackup 11.2 について	8
	NetBackup 11.2 のリリースについて	8
	NetBackup の最新情報について	9
	NetBackup サードパーティの法的通知について	9
第 2 章	新機能、拡張機能および変更	10
	NetBackup の新しい拡張と変更について	10
	NetBackup 11.2 の新機能、変更点、拡張機能	10
	Cohesity 用語の変更点	12
	新しい Cohesity 統合マニュアルポータルについて	13
	ナレッジベースの記事の更新	13
	11.2 以降の NetBackup 管理コンソール (Java UI) の EOL	13
	脅威検出のためのファイルハッシュ計算	14
	NetBackup 11.2 のインストール後またはこのバージョンへのアップグ レード後すぐにプライマリサーバー上のクラウド構成ファイルを更 新する	14
	将来のリリースで廃止される予定のいくつかのシャットダウンコマンド	15
	NetBackup 11.2 の RESTful API	15
	NetBackup 11.2 のサポートの追加および変更点	16
	NetBackup 11.2 で認定された NetBackup 11.1.0.2 以前のサポー トの追加および変更点	17
	NetBackup MSDP の STIG コンプライアンスのサポート	19
	アーカイブ階層に格納されているイメージの検証のサポート	19
	MSDP の重複排除およびパフォーマンスの強化	19
	MSDP クラウドのローカル WORM キャッシュのサポート	19
	アクティビティモニターにおけるキューに投入されたジョブのジョブ優 先度の変更	20
	MongoDB Ops Manager のバックアップ機能の強化	20
	NetBackup Web UI のログ収集の強化	21
	NetBackup Web UI の[ポリシー (Policies)]の[バックアップ対象 (Backup Selections)]タブ	21
	レポート時間の選択と制御の強化	22
	Helios との NetBackup の統合	22
	OCI (Oracle Cloud Infrastructure) のアクセラレータのサポート	23

標準ポリシーとカタログポリシーの動的マルチストリームのサポート	23
クラウドオブジェクトストアのバックアップの自動再開	23
Kubernetes Operator の柔軟なバージョンの互換性	24
NetBackup Web UI からの MS Exchange リカバリ	24
Cloud Scale の拡張機能と配備に関する更新	25
クラウド仮想マシンの並行リストア	25
DENY_ALL ネットワークポリシーを使用した Azure ディスクの保護のサポート	26
Oracle ポリシーおよび MS-SQL-Server ポリシーのジョブの耐性	26
KVM サポートに関する拡張機能	26
SAP HANA インテリジェントポリシー	26
役割の昇格機能	26
Web UI を使用した KMS の構成と管理	27
Web UI のトラブルシュータ	27
EEB 管理 Web UI の拡張機能	27

第 3 章	操作上の注意事項	28
	NetBackup 11.2 の操作上の注意事項について	28
	NetBackup のインストールとアップグレードの操作上の注意事項	29
	Windows で NetBackup 11.2 のアップグレードが失敗した場合に以 前のログフォルダ構造に戻す	29
	ネイティブインストールの要件	29
	NetBackup サーバーで RFC 1123 と RFC 952 に準拠したホスト名 を使用する必要がある	30
	HP-UX Itanium vPars SRP のコンテナのサポートについて	30
	NetBackup がインストールされるデフォルトパスの変更	31
	MongoDB Ops Manager のアップグレード動作	31
	NetBackup 管理インターフェースの操作上の注意事項	33
	NetBackup 管理コンソールの X フォワーディングで断続的に問題が 発生する	33
	Solaris 10 Update 2 以降がインストールされている Solaris SPARC 64 ビットシステムで簡体中国語 UTF-8 ロケールを使用すると、 NetBackup 管理コンソールでエラーが発生する	33
	Web サービスの再起動後にログ収集をキャンセルできない	34
	NetBackup Bare Metal Restore の操作上の注意事項	34
	PIT リストア後[ホスト ID が存在しません (The host ID does not exist)] というエラーが表示される	34
	Linux クライアントでの BMR リストア後に NetBackup サービスが自動 的に起動しないことがある	35

Windows 2025 クライアントのリストア時に AWS で NetBackup Bare Metal Restore がハングアップする	35
Windows BMR DDR のリストア後に、ミラー化されたダイナミックボリュームがドライブ文字を受信しないことがある	35
Windows での ReFS ボリュームの BMR リストアエラー (2016 ~ 2025)	36
Bare Metal Restore (BMR) 操作後、Windows の[スタート]メニューと検索が機能しない	39
LVM PV が RAW ディスクに作成された場合、BMR の後にシン論理ボリュームがリストアされない	43
NetBackup クラウドオブジェクトストアの作業負荷の操作上の注意事項	46
NetBackup 11.1 より前のバージョンからアップグレードした後の完全バックアップ	46
バックアップホストとしての RHEL メディアサーバーのサポート対象バージョン	46
NetBackup バージョン 11.2 の AIR (自動イメージレプリケーション) では NetBackup 10.2 以降が必要	47
バックアップジョブが応答なくなり、一時的なステージング場所で大量の領域を消費する。	47
NetBackup NAS の操作上の注意事項	47
ファイルパスの親ディレクトリが NDMP 増分イメージに存在しないことがある	48
NetBackup クラウド作業負荷の操作上の注意事項	48
CMK を使用して暗号化されたディスクを持つ VM とその他の OCI 資産が、NetBackup UI で削除済みとしてマークされる。	48
NetBackup の国際化と日本語化の操作に関する注意事項	48
データベースおよびアプリケーションエージェントでのローカライズ環境のサポート	49
特定の NetBackup ユーザー定義の文字列には非 US ASCII 文字を含めないようにする	49
Helios との NetBackup の統合 - 操作上の注意事項	50
Sheltered Harbor 接続エラー	51
付録 A NetBackup ユーザーの SORT について	52
Cohesity Services and Operations Readiness Tools について	52
付録 B NetBackup のインストール要件	54
NetBackup のインストール要件について	54
NetBackup に必要なオペレーティングシステムパッチと更新	55
NetBackup 11.2 のバイナリサイズ	56

付録 C	NetBackup の互換性の要件	59
	About compatibility between NetBackup versions	59
	NetBackup の互換性リストと情報について	60
	NetBackup のライフサイクル終了のお知らせについて	60
付録 D	他のNetBackup マニュアルおよび関連マニュアル	62
	NetBackup の関連マニュアルについて	62

NetBackup 11.2 について

この章では以下の項目について説明しています。

- [NetBackup 11.2 のリリースについて](#)
- [NetBackup の最新情報について](#)
- [NetBackup サードパーティの法的通知について](#)

NetBackup 11.2 のリリースについて

『NetBackup リリースノート』のドキュメントは NetBackup のバージョンのリリースに関する情報のスナップショットとして機能します。古い情報およびリリースに適用しない情報はリリースノートから削除されるか、または NetBackup のマニュアルセットの別の所に移行されます。

p.10 の「[NetBackup の新しい拡張と変更について](#)」を参照してください。

EEB およびリリース内容について

NetBackup 11.2 には、以前のバージョンの NetBackup で顧客に影響を与えていた既知の問題の多くに対する修正が組み込まれています。これらの修正の一部は、お客様固有の問題に関連します。このリリースに組み込まれた顧客関連の修正のいくつかは、EEB (Emergency Engineering Binary) として利用可能になりました。

NetBackup 11.2 で修正された既知の問題を示す EEB および Etrack のリストは、Cohesity Operations Readiness Tools (SORT) Web サイトと、『NetBackup Emergency Engineering Binary ガイド』にあります。

p.52 の「[Cohesity Services and Operations Readiness Tools について](#)」を参照してください。

NetBackup アプライアンスのリリースについて

NetBackup アプライアンスは、事前設定バージョンの NetBackup を含むソフトウェアパッケージを実行します。新しいアプライアンスソフトウェアリリースの開発時、NetBackup の

最新バージョンがアプライアンスコードの構築基盤として使われます。たとえば、**NetBackup Appliance 3.1** は **NetBackup 8.1** を基盤としています。この開発モデルにより、**NetBackup** 内でリリースされたすべての適用可能機能、拡張機能、修正が確実にアプライアンスの最新リリースに含まれます。

NetBackup アプライアンスソフトウェアは、その構築基盤となる **NetBackup** リリースと同時に、またはそのすぐ後にリリースされます。**NetBackup** アプライアンスを利用する場合、実行する **NetBackup** アプライアンスバージョンの『**NetBackup** リリースノート』を確認する必要があります。

アプライアンス固有のマニュアルは次の場所から入手できます。

<https://support.cohesity.com/s/article/article-100040113>

NetBackup の最新情報について

NetBackup の最新情報や発表については、次の場所から利用可能な **NetBackup** の最新情報 Web サイトを参照してください。

<https://support.cohesity.com/s/article/article-100022065>

他の **NetBackup** 固有の情報は、次の場所から提供されています。

https://www.veritas.com/support/en_US/15143.html

NetBackup サードパーティの法的通知について

NetBackup には、**Cohesity** による所有者の掲示が義務付けられているサードパーティソフトウェアが含まれている場合があります。サードパーティプログラムの一部は、オープンソースまたはフリーソフトウェアライセンスで提供されます。**NetBackup** に含まれる本使用許諾契約は、オープンソースまたはフリーソフトウェアライセンスでお客様が有する権利または義務を変更しないものとします。

これらのサードパーティプログラムの所有権通知とライセンスは、次の Web サイトで入手できる『**NetBackup** サードパーティの法的通知』文書に記載されています。

<https://www.cohesity.com/agreements>

新機能、拡張機能および変更

この章では以下の項目について説明しています。

- [NetBackup の新しい拡張と変更について](#)
- [NetBackup 11.2 の新機能、変更点、拡張機能](#)

NetBackup の新しい拡張と変更について

NetBackup リリースには、新機能および製品修正に加えて顧客対応の新しい拡張と変更が含まれることがよくあります。よくある拡張の例には、新しいプラットフォームのサポート、アップグレードされた内部ソフトウェアコンポーネント、インターフェースの変更、拡張された機能のサポートなどがあります。新しい拡張と変更のほとんどは、『[NetBackup リリースノート](#)』および [NetBackup の互換性リスト](#) に文書化されます。

メモ: 『[NetBackup リリースノート](#)』には、特定の [NetBackup](#) バージョンレベルでそのリリースのタイミングで開始される新しいプラットフォームサポートのみがリストされます。ただし、[Cohesity](#) によって、以前のバージョンの [NetBackup](#) へのプラットフォームサポートのバックデートが定期的に実行されます。最新のプラットフォームサポートのリストについては、[すべてのバージョンの NetBackup 互換性リスト](#) を参照してください。

p.8 の「[NetBackup 11.2 のリリースについて](#)」を参照してください。

p.60 の「[NetBackup の互換性リストと情報について](#)」を参照してください。

NetBackup 11.2 の新機能、変更点、拡張機能

NetBackup 11.2 の新機能、変更点、および拡張機能は、以下のカテゴリ別にグループ化されます。トピックに関する詳細情報をお読みになるにはリンクを選択します。

新機能

- 「Cohesity 用語の変更点」
- 「NetBackup 11.2 の RESTful API」
- 「NetBackup MSDP の STIG コンプライアンスのサポート」
- 「アーカイブ階層に格納されているイメージの検証のサポート」
- 「MSDP の重複排除およびパフォーマンスの強化」
- 「Helios との NetBackup の統合」
- 「MSDP クラウドのローカル WORM キャッシュのサポート」
- 「OCI (Oracle Cloud Infrastructure) のアクセラレータのサポート」
- 「標準ポリシーとカタログポリシーの動的マルチストリームのサポート」
- 「クラウドオブジェクトストアのバックアップの自動再開」
- 「Cloud Scale の拡張機能と配備に関する更新」
- 「クラウド仮想マシンの並行リストア」
- 「DENY_ALL ネットワークポリシーを使用した Azure ディスクの保護のサポート」
- 「脅威検出のためのファイルハッシュ計算」
- 「Oracle ポリシーおよび MS-SQL-Server ポリシーのジョブの耐性」
- 「KVM サポートに関する拡張機能」
- 「SAP HANA インテリジェントポリシー」
- 「役割の昇格機能」
- 「Web UI を使用した KMS の構成と管理」
- 「Web UI のトラブルシュータ」
- 「EEB 管理 Web UI の拡張機能」

安全な通信の機能、変更点、および拡張機能

- **メモ:** NetBackup 11.2 をインストールまたは 8.1 より前のリリースからアップグレードする前に、『NetBackup 安全な通信 (最初にお読みください)』を必ずお読みになり、内容をご確認ください。NetBackup 8.1 には、NetBackup コンポーネントの安全な通信を向上させる多くの拡張機能が含まれています。『NetBackup 安全な通信 (最初にお読みください)』というドキュメントでは、次の拡張機能の特徴と利点を説明しています。

[NetBackup 安全な通信 \(最初にお読みください\)](#)

サポートの変更点と拡張機能

- 「NetBackup 11.2 のサポートの追加および変更点」
- 「NetBackup 11.2 で認定された NetBackup 11.1.0.2 以前のサポートの追加および変更点」
- 「将来のリリースで廃止される予定のいくつかのシャットダウンコマンド」

インストール、アップグレード、および構成の変更点と拡張機能

- 「Kubernetes Operator の柔軟なバージョンの互換性」

クラウド関連の変更点と拡張機能

- 「NetBackup 11.2 のインストール後またはこのバージョンへのアップグレード後すぐにプライマリサーバー上のクラウド構成ファイルを更新する」

作業負荷とデータベースエージェントの変更点と拡張機能

- 「NetBackup Web UI のログ収集の強化」
- 「NetBackup Web UI からの MS Exchange リカバリ」
- 「NetBackup Web UI の[ポリシー (Policies)]の[バックアップ対象 (Backup Selections)]タブ」
- 「アクティビティモニターにおけるキューに投入されたジョブのジョブ優先度の変更」
- 「レポート時間の選択と制御の強化」
- 「MongoDB Ops Manager のバックアップ機能の強化」

その他の重要な通知事項

- 「11.2 以降の NetBackup 管理コンソール (Java UI) の EOL」
- 「ナレッジベースの記事の更新」
- 「新しい Cohesity 統合マニュアルポータルについて」

Cohesity 用語の変更点

Cohesityでは最新の用語を使用するため、特定の古い用語を最新の用語を置き換え始めています。

メモ: Cohesityでは用語の更新を続けているため、非推奨の用語と新しい用語が同じ意味で使用される場合があります。

非推奨の用語

マスター

スレーブ

ホワイトリスト

ブラックリスト

ホワイトハット

ブラックハット

新しい用語

プライマリ

セカンダリサーバーまたはメディアサーバー

許可リスト

ブロックリスト

倫理的

非倫理的

新しい Cohesity 統合マニュアルポータルについて

新しい統合マニュアルポータル (UDP) を使用して、すべての Cohesity 製品マニュアルにアクセスできます。

docs.cohesity.com

NetBackup のマニュアルは、次の場所の新しい UDP で参照できます。

<https://docs.cohesity.com/docs/netbackup>

ナレッジベースの記事の更新

ナレッジベースの記事 (TechNote) は、ベリタスのドメインから Cohesity ドメインに移行されました。そのため、ユーザーがこれらの記事にアクセスするには MyCohesity アカウントが必要です。すでにアカウントを持っている場合は、ログインして引き続きコンテンツにアクセスすることができます。

新しい MyCohesity アカウントを作成するには、次の Web サイトにアクセスしてください。

<https://my.cohesity.com>

11.2 以降の NetBackup 管理コンソール (Java UI) の EOL

NetBackup 11.2 以降、Windows と UNIX/Linux の NetBackup 管理コンソール (Java UI) と Java リモート管理コンソール (RAC) は提供されなくなります。これらのコンポーネントはインストールできなくなります。これらのコンポーネントは、NetBackup 11.2 アップグレード中に削除されます。

ただし、Java バックアップ、アーカイブおよびリストア (BAR) GUI は、現在サポートされているプラットフォームで利用可能です。Windows MFC BAR GUI も利用可能です。

NetBackup 11.2 のマニュアルには、古いバージョンの NetBackup 管理コンソール (または Java UI) とその機能に関する記載があります。これらの記載は最終的に削除されます。

脅威検出のためのファイルハッシュ計算

NetBackup は、圧縮形式およびアーカイブ形式内のファイルを含む、バックアップイメージに格納されたファイルのハッシュ計算をサポートしています。

この機能は、バックアップ後に **SHA-256** ハッシュを生成し、脅威検出に使用するために保存します。これらのハッシュは、既知の悪意のあるインジケータと照合でき、バックアップデータの潜在的な脅威を識別するのに役立ちます。

詳しくは『NetBackup™ セキュリティおよび暗号化ガイド』を参照してください。

NetBackup 11.2 のインストール後またはこのバージョンへのアップグレード後すぐにプライマリサーバー上のクラウド構成ファイルを更新する

NetBackup 環境でクラウドストレージを使用する場合には、NetBackup 11.2 をインストールするか、そのバージョンにアップグレードした直後に、NetBackup プライマリサーバー上のクラウド構成ファイルを更新する必要がある場合があります。NetBackup 11.2 へのアップグレード後にクラウドプロバイダまたは関連の拡張機能がクラウド構成ファイルから利用できない場合、関連する操作は失敗します。

Cohesity は次のリリースを待たずに、クラウド構成ファイルに新しいクラウドサポートを継続的に追加します。クラウド構成ファイルの更新は、クラウド構成パッケージのバージョン 2.13.6 以降にクラウドストレージプロバイダが追加された場合にのみ必要です。

バージョン 2.14.1 以降には次のクラウドサポートが追加されていますが、NetBackup 11.2 の最終ビルドには含まれていませんでした。

- HPE Alletra Storage MP X10000 - Object Lock (S3)
- COSP (クラウドオブジェクトストア保護) - HPE Alletra Storage MP X10000
- Secsmart HyperProtect Data Lake Storage (S3)
- COSP (クラウドオブジェクトストア保護) Nutanix Objects
- COSP (クラウドオブジェクトストア保護) - PSPACE InfiniStor
- Samsung Cloud Platform (S3)
- クラウドオブジェクトストア保護 (COSP) - Samsung Cloud Platform
- FortKnox for NetBackup AWS (S3) リージョン
 - アジア太平洋 (台北)
 - アジア太平洋 (マレーシア)
 - アジア太平洋 (ニュージーランド)
 - アジア太平洋 (タイ)
- Amazon (S3) リージョン:

- アジア太平洋 (ニュージーランド)

最新のクラウド構成パッケージについては、次の記事を参照してください。

https://support.cohesity.com/s/update-detail?c__updateId=UPD971796

クラウドストレージ構成ファイルの追加方法については、次の技術情報を参照してください。

<https://support.cohesity.com/s/article/article-100039095>

将来のリリースで廃止される予定のいくつかのシャットダウンコマンド

NetBackup プロセスとデーモンのシャットダウン用の新しい、詳細に文書化されたコマンドが今後のリリースで提供される予定です。その時点で、次のコマンドは利用できなくなります。

- `bp.kill_all`
- `bpdwn`
- `bpclusterkill`

この変更に応じた計画を立ててください。新しいコマンドは、今後のリリースノートおよび『NetBackup コマンドリファレンスガイド』で発表されます。

NetBackup 11.2 の RESTful API

NetBackup 11.2 は、更新された RESTful アプリケーションプログラミングインターフェース (API) と新しい RESTful API の両方を備えています。これらの API は、REST (Representational State Transfer) アーキテクチャで構築されています。これらは、ご使用の環境で NetBackup を構成および管理できる Web サービスベースのインターフェースを提供します。

API のマニュアル

NetBackup API のマニュアルは、SORT とプライマリサーバーにあります。「はじめに」のセクションで、該当するバージョンのトピックと新機能のトピックを参照してください。

- SORT の場合:

NetBackup API のマニュアルは、**SORT** で入手できます。

[HOME]、[ナレッジベース (KNOWLEDGE BASE)]、[文書 (Documents)]、[製品バージョン (Product Version)] 11.2

[API リファレンス (API Reference)] の下を参照します。『はじめに』のマニュアルには、NetBackup API の使用に関する背景情報が記載されています。API YAML ファイルも参照できますが、実用的ではありません。SORT 上のマニュアルからは API をテストできません。

- プライマリサーバーの場合:

API は、プライマリサーバー上の YAML ファイルに格納されています。

`https://<primary_server>/api-docs/index.html`

API は Swagger 形式で記述されています。この形式では、コードを確認し、API の実際の呼び出しを実行して機能をテストできます。Swagger API を使用するには、プライマリサーバーと API にアクセスするための適切なセキュリティ権限が必要です。

注意: Cohesity は、開発環境でのみ API をテストすることをお勧めします。Swagger ファイルから実際の API の呼び出しを実行できるため、本番環境では API をテストしないでください。

NetBackup 11.2 のサポートの追加および変更点

メモ: この情報は変更されることがあります。最新の製品およびサービスのサポートの追加および変更については、[すべてのバージョンの NetBackup 互換性リスト](#)を参照してください。

NetBackup 11.2 以降では、次の製品およびサービスがサポートされるようになりました。
プラットフォーム:

- FTMS サーバー - Red Hat Enterprise Linux 8.10 [Qlogic]
- プライマリサーバー - Oracle Linux 10.1 (UEK/RHCK)
- メディアサーバー - Oracle Linux 10.1 (UEK/RHCK)
- プライマリサーバー - Rocky Linux 10.1
- メディアサーバー - Rocky Linux 10.1

データベース:

- PostgreSQL - Red Hat Enterprise Linux 9 [z/Architecture]
- PostgreSQL - Red Hat Enterprise Linux 8 [z/Architecture]
- MySQL - Red Hat Enterprise Linux 9 [z/Architecture]
- MySQL - Red Hat Enterprise Linux 8 [z/Architecture]
- Oracle Database 19c - Red Hat Enterprise Linux 9.x [z/Architecture]
- Informix 15.x - AIX 7.3 [POWER]
- Informix 15.x - Red Hat Enterprise Linux 10
- SAP ASE 16.1 - Red Hat Enterprise Linux 10 [x86-64]

OpenStorage:

- Dell EMC Data Domain OpenStorage プラグイン 8.6 - Oracle Linux 10.x
- Dell EMC Data Domain OpenStorage プラグイン 8.6 - Rocky Linux 10.x

NetBackupSnapshotManager:

- NetBackup Snapshot Manager - Rocky Linux 10

Bare Metal Restore (BMR):

- プライマリ/クライアント/ブートサーバー - Red Hat Enterprise Linux 9.7
- プライマリ/クライアント/ブートサーバー - Red Hat Enterprise Linux 9.6

NetBackup 11.2 で認定された NetBackup 11.1.0.2 以前のサポートの追加および変更点

メモ: この情報は変更されることがあります。最新の製品およびサービスのサポートの追加および変更については、[すべてのバージョンの NetBackup 互換性リスト](#)を参照してください。

次の製品とサービスは NetBackup 11.1.0.2 以前のバージョンでサポートされ、NetBackup 11.2 で認定されています。

プラットフォーム:

- クライアント
 - クライアント - Ubuntu 26.04
 - VxFS ファイルシステムの認定 – Red Hat Enterprise Linux 9.7
 - VxFS ファイルシステムの認定 – Red Hat Enterprise Linux 10.1
 - GPFS ファイルシステム 6.0.0.1 – Red Hat Enterprise Linux 8.10
 - GPFS ファイルシステム 6.0.0.1 – Red Hat Enterprise Linux 9.6
 - GPFS ファイルシステム 6.0.0.1 – Ubuntu 22.04
 - GPFS ファイルシステム 6.0.0.1 – Ubuntu 24.x
 - Lustre ファイルシステム 2.17.x – Red Hat Enterprise Linux 9.x
 - Lustre ファイルシステム 2.17.x – Red Hat Enterprise Linux 10.x
 - Lustre ファイルシステム 2.17.x – SUSE 15 SP7
 - VxFS ファイルシステムの認定 – Oracle Linux 9.7
 - VxFS ファイルシステムの認定 – Oracle Linux 10.1

データベース:

- SAP HANA 2.0 SP08 – Red Hat Enterprise Linux 10.x
- SAP ASE 16.1 – Red Hat Enterprise Linux 10
- Oracle Database 26ai – SUSE Linux 15.x
- PostgreSQL 18.x – Ubuntu 22.04
- PostgreSQL 18.x – Oracle Linux 10.x
- PostgreSQL 17.x – Rocky Linux 10
- PostgreSQL 17.x – Oracle Linux 10
- PostgreSQL 18.x – Windows Server 2025
- DB2 12.x – Ubuntu 24.04
- DB2 12.x – Red Hat Enterprise Linux 10.x
- DB2 12.x – Windows Server 2025
- SQLite 3.51.x – Windows Server 2025
- SQLite 3.46.x – Rocky Linux 10.x
- MySQL 8.x – Oracle Linux 9

NDMP:

- NetApp ONTAP 9.18.x NDMP
- Dell EMC PowerScale OneFS 9.11 NDMP

OpenStorage:

- Dell EMC Data Domain OpenStorage plug-in 8.6 – Oracle Linux 9.x
- Dell EMC Data Domain OpenStorage plug-in 8.6 – Rocky Linux 9.x
- Dell EMC Data Domain OpenStorage plug-in 8.6 – Red Hat Enterprise Linux 10.x

CloudStorage:

- FortKnox for NetBackup – Azure リージョンチリ中部
- FortKnox for NetBackup – AWS リージョンアジア太平洋 (マレーシア)
- FortKnox for NetBackup – AWS リージョンイスラエル (テルアビブ)

クラスタ化されたプライマリサーバー:

- InfoScale 9.1 – Windows Server 2022
- InfoScale Cluster 9.1 – Red Hat Enterprise Linux 9.7

テープライブラリ:

- Quantum Scalar i3

テープドライブ:

- MR216i SAS カード付き HPE LTO8 テープドライブ
- MR216i SAS カード付き HPE LTO9 テープドライブ
- IBM LTO-9 テープドライブ

NetBackup MSDP の STIG コンプライアンスのサポート

NetBackup 11.2 以降、MSDP では、BYO で以下の RPM パッケージの検証を有効にすることで STIG (セキュリティ技術導入ガイド) コンプライアンスをサポートします。

- VRTSpddea
- VRTSpddeu
- VRTSpddes

アーカイブ階層に格納されているイメージの検証のサポート

NetBackup では、Amazon Glacier、Amazon Glacier Deep Archive、および Azure Archive などのアーカイブ階層に格納されているバックアップイメージの検証をサポートしています。詳しくは、『NetBackup 重複排除ガイド』を参照してください。

MSDP の重複排除およびパフォーマンスの強化

NetBackup 11.2 では、バックアップ、最適化複製、レプリケーションに関して MSDP 重複排除の効率とパフォーマンスが改善されています。

機能強化には、最適化複製ジョブとレプリケーションジョブにおけるイメージフラグメントの並列処理のデータ局所性とパフォーマンスの向上、MSDP-C の予測フィンガープリントキャッシュのより効果的な使用、最近のバックアップを使用したフィンガープリントキャッシュのバックグラウンド入力、クライアント側の重複排除の効率を改善するための最新イメージの動的選択のサポートが含まれます。

詳しくは、『NetBackup 重複排除ガイド』を参照してください。

MSDP クラウドのローカル WORM キャッシュのサポート

NetBackup 11.2 では、OCSD (Open Cloud Storage Daemon) を介した MSDP クラウドのローカル WORM キャッシュサポートが導入されています。この機能強化により、関連するクラウドメタデータをローカルにキャッシュすることでクラウド API 呼び出しが削減され、MSDP クラウドボリュームでオブジェクトレベルの改ざん防止機能 (WORM) を使用するときのクラウドコストの削減に役立ちます。データの一貫性を確保するためにキャッシュを無効にして再び有効にすると、キャッシュは自動的に再構築されます。この機能は

DBPaaS 作業負荷ではサポートされません。また、現在以外のオブジェクトバージョンを削除するクラウドバケットライフサイクルポリシーは有効にしないでください。

詳しくは、次の記事を参照してください。

<https://support.cohesity.com/s/article/MSDP-Cloud-OCSD-WORM-Cache>

アクティビティモニターにおけるキューに投入されたジョブのジョブ優先度の変更

キューに投入されたバックアップジョブの実行優先度を、ジョブをキャンセルしたり再起動したりせずに、NetBackup Web UI から直接変更することができます。

この機能強化により、管理者は作業負荷のスケジュールを細かく制御できるため、システムリソースに制約がある場合に、重要なジョブを優先度の低い作業負荷よりも先に実行できます。

主な利点:

- ジョブの実行を中断することなく、ジョブのスケジュールを動的に調整できる
- 作業負荷のピーク時に緊急バックアップジョブを優先することができます
- キューに登録済みの複数のジョブを 1 つの操作で管理できる

詳しくは、『NetBackup Web UI 管理者ガイド』の「監視と通知」、「ジョブの監視」、「ジョブ: キャンセル、一時停止、再起動、再開、削除、またはジョブの優先度の変更」のセクションを参照してください。

MongoDB Ops Manager のバックアップ機能の強化

このリリースでは、次の機能拡張が導入されています。

- 増分スナップショットバックアップ (INCR) 前回の完全バックアップ以降のデータ変更のみをキャプチャする増分スナップショットバックアップをサポートし、MongoDB Ops Manager の作業負荷に対するバックアップオーバーヘッドを削減します。
- トランザクションログ (TLOG) のバックアップトランザクションログ (oplog) のバックアップがサポートされ、完全バックアップおよび増分バックアップとともに、指定した時点へのリカバリを実行できます。
- バックアップの優先ノード選択レプリカセットとシャードの優先ノードを選択して、MongoDB Ops Manager のバックアップ操作に使用するノードを制御できます。

詳細情報:

- 『NetBackup for MongoDB Manager 管理者ガイド』の「バックアップ」、「ポリシー」のセクションを参照してください。
- p.31 の「MongoDB Ops Manager のアップグレード動作」を参照してください。

NetBackup Web UI のログ収集の強化

NetBackup のログ収集エクスペリエンスが強化されており、Cohesity テクニカルサポートのためのログを収集する際の柔軟性と信頼性が向上しています。

管理者は、選択したホストから診断情報、デバッグログ、または特定のデバッグログファイルのみのどれを収集するかを選択できます。

ワークフローが強化されており、ログ収集エラーやディスク容量不足を防ぐために、ホストレベルとプライマリサーバーでのディスク領域の自動検証が導入されました。

ジョブ ID が指定されると、NetBackup は関連するホスト、ログ、時間範囲を自動的に選択します。管理者は、特定のログファイルを手動で選択して、ログサイズと収集時間を減らすこともできます。

詳しくは、『NetBackup ログリファレンスガイド』の「ログ収集ユーティリティの使用」、「レコードの追加とログの収集」のセクションを参照してください。

p.34 の「Web サービスの再起動後にログ収集をキャンセルできない」を参照してください。

NetBackup Web UI の[ポリシー (Policies)]の[バックアップ対象 (Backup Selections)]タブ

NetBackup Web UI の[ポリシー (Policies)]ワークフロー内に[バックアップ対象 (Backup selections)]タブが追加されています。この機能強化により、各ポリシーに構成されているバックアップ対象リストが明確に表示され、管理者はバックアップに含まれるデータをすばやく確認できます。

主な特長

- Web UI からポリシーごとの既存のバックアップ対象を直接表示できます。
- 同じポリシーに対して個別にリストされた複数のバックアップ対象を参照できます。
- バックアップの対象範囲を 1 カ所で検証できるため、ポリシーの確認、監査、トラブルシューティングが改善されます。

重要な動作の詳細

- バックアップ対象がすでに構成されているポリシーについてのみ、バックアップ対象が表示されます。
- バックアップ対象が構成されていないポリシーは[バックアップ対象 (Backup selections)]タブに表示されません。
- バックアップ対象の範囲は、クライアントごとではなく、ポリシーごとに決定されます。
- 機能が有効になった後、既存のポリシーによって自動的にタブにデータが入力されます。可視性はポリシーキャッシュの同期間隔によって決まります。

権限

- 追加の役割は必要ありません。
- ポリシーのバックアップ対象を表示するには、そのポリシーへの表示アクセスが必要です。

詳しくは、『NetBackup Web UI 管理者ガイド』で「バックアップの構成」、「ポリシーの管理」、「ポリシーユーティリティについて」のセクションを参照してください。

レポート時間の選択と制御の強化

レポートでは、レポート生成の期間と実行をより正確に制御できます。

- レポートを生成する場合は、開始日時と終了日時の両方を指定します。
- [最も古いイベント (Earliest available)]、[過去 24 時間 (Last 24 Hours)]、[現在の日時 (Current time)]などのクイック選択オプションを使用できます。
- 新しい停止オプションを使用して、実行中のレポートをキャンセルできます。

これらの機能強化により、Web UI レポートを生成する際の精度と柔軟性が向上します。

Helios との NetBackup の統合

このリリースでは、Helios とのネイティブ統合により、NetBackup がドメインレベルの管理を超えて拡張され、複数の NetBackup 環境で一元的な可視性、分析、運用制御が可能になります。

NetBackup Web UI アクセスの前提条件の構成 – 認証

プライマリサーバーで NetBackup Web UI にアクセスする前に、Helios (NetBackup-Alta) を介してユーザーの権限が付与されていることを確認します。

- 事前定義された NetBackup-Alta の役割を Helios ユーザーに割り当てます。
必要なアクセスレベルに応じて、次のいずれかの事前定義済みの役割を割り当てます。
 - NetBackup 管理者 (NetBackup Admin): NetBackup プライマリサーバーへの管理者レベルのアクセスを提供します。
 - NetBackup 閲覧者 (NetBackup Viewer): NetBackup プライマリサーバーへの読み取り専用アクセスを提供します。
- Web UI アクセス用の NetBackup-Alta のカスタム役割の作成
より制御されたアクセスが必要な場合は、Web UI のアクセス権限を持つカスタム役割を作成します。
 - NetBackup Web UI のアクセス権限を有効にします。
 - アクセスが必要な範囲 (プライマリサーバー) を選択します。

- 選択した NetBackup プライマリサーバーに適切な事前定義された役割またはカスタム役割を選択します。
- カスタム役割を作成し、その役割をユーザーに割り当てます。
カスタム役割は、NetBackup プライマリサーバーで定義されている役割から権限を継承でき、必要に応じてユーザーに割り当てることができます。

これで以下のことができます。

- 複数の NetBackup ドメインを登録して、単一のクラウドベースのコンソールから管理する
- ジョブ、ポリシー、資産、接続性、バージョンをグローバルに可視化する
- リスクスコア、異常検出、マルウェアに関するインサイトを使用して、サイバーレジリエンスを監視する
- ダッシュボードを切り替えずにポリシー、ジョブ、リカバリの操作を一元的に実行する
- 生成 AI アシスタント Copilot を使用して、ガイド付きトラブルシューティング、レポートクエリー、運用上のインサイトの取得を行う

この統合には最小限の NetBackup 側の変更が必要です。この統合では、アウトバウンド専用の安全な通信を使用し、配備しやすさを確保しながら、運用効率を高めることができます。

詳しくは、[Helios](#) のマニュアルを参照してください。

p.50 の「[Helios との NetBackup の統合 - 操作上の注意事項](#)」を参照してください。

OCI (Oracle Cloud Infrastructure) のアクセラレータのサポート

OCI バックアップでは、増分バックアップの NetBackup アクセラレータをサポートしています。

詳しくは、『NetBackup™ Web UI クラウド管理者ガイド』を参照してください。

標準ポリシーとカタログポリシーの動的マルチストリームのサポート

NetBackup の標準ポリシーとカタログポリシーの一部として、動的マルチストリームがサポートされます。

詳しくは、『NetBackup Web UI 管理者ガイド』の各トピックを参照してください。

クラウドオブジェクトストアのバックアップの自動再開

チェックポイントで再開可能なバックアップにおける未完了のバックアップジョブの自動再開が、クラウドオブジェクトストアのバックアップでサポートされます。

詳しくは、『NetBackup™ クラウドオブジェクトストア管理者ガイド』を参照してください。

Kubernetes Operator の柔軟なバージョンの互換性

NetBackup Kubernetes Operator は、NetBackup プライマリサーバーとメディアサーバーが同じ NetBackup バージョンである必要がなくなりました。Operator は、接続先のサーバーよりも前の NetBackup バージョンで実行できます。

次の Kubernetes Operator を使用できます。

- メディアサーバーより最大で 1 つ前の NetBackup バージョン
- プライマリサーバーより最大で 2 つ前の NetBackup バージョン

Operator は、それ自体のバージョンで利用可能な機能をサポートします。このようなサポート対象の構成により、段階的なアップグレードシナリオでの柔軟性が向上します。

このアップグレードモデルの間は、既存の Kubernetes ポリシーで引き続きバックアップが実行されます。ただし、Kubernetes Operator がアップグレードされるまで、リストア操作を手動で実行する必要があります。

詳しくは、『NetBackup for Kubernetes 管理者ガイド』の「NetBackup Kubernetes Operator の配備と構成」、「NetBackup Kubernetes Operator のアップグレード」のセクションを参照してください。

NetBackup Web UI からの MS Exchange リカバリ

NetBackup Web UI から Microsoft Exchange の作業負荷を直接リカバリできます。

このリリースでは、Microsoft Exchange バックアップに Web UI ベースのリカバリが導入されており、管理者は従来のインターフェースを使用せずにリカバリ操作を実行できます。

主な機能:

- NetBackup Web UI から Microsoft Exchange リカバリを開始する
- バックアップから個々の項目を選択して個別リカバリを実行する
- 元の場所または代替のリストア先にデータをリストアする
- ロールフォワードリカバリや指定した時点へのリカバリなどのリカバリ動作を選択する
- Web UI のアクティビティモニターからリストアジョブを直接監視する

この機能強化により、NetBackup Web UI 内でリカバリ操作が一元化され、Exchange のリカバリワークフローを簡略化できます。

詳しくは、『NetBackup for Microsoft Exchange Server 管理者ガイド』で「NetBackup Web UI を使用した MS-Exchange のリカバリの実行」のセクションを参照してください。

Cloud Scale の拡張機能と配備に関する更新

この NetBackup 11.2 のリリースでは、Cloud Scale Technology に、拡張機能および配備の更新に関連する変更が含まれています。詳しくは、『Kubernetes クラスタ向け Cohesity Cloud Scale Technology 手動配備ガイド』を参照してください。

MSDP クラウドキャッシュとしての NVMe ローカルストレージのサポート

MSDP-C では、Kubernetes ワーカーノードのローカル NVMe ストレージを MSDP エンジンポッドのクラウドキャッシュとして使用できるようになりました。この機能強化により、パフォーマンスが向上し、クラウドに基づく MSDP 配備でのクラウドストレージコストを削減できます。この機能を構成するには、MSDP Scaleout カスタムリソース (CR) の注釈を指定し、NVMe 対応マウントポイントを使用するようにクラウドキャッシュ構成を更新します。

Cloud Scale 配備に関する証明書管理とトラブルシューティングの強化

NetBackup Cloud Scale Kubernetes 配備での証明書管理が強化され、信頼性と可視性が向上しています。更新された証明書配布メカニズムにより、共有 NFS ストレージに対する依存関係がなくなり、ポッド間でのより一貫性のある証明書の可用性が実現しています。これらの改善により、証明書に関連するエラーの可視性が向上し、ポッドの通信と起動に影響する問題からのリカバリが簡略化されています。

Kubernetes のトラブルシューティング用のデバッグツールコンテナ

NetBackup では、Kubernetes の配備をトラブルシューティングするための一時的な専用環境を提供するデバッグツールコンテナが導入されています。このコンテナは、既存の NetBackup コンテナイメージを変更せずに、`kubect1 debug` コマンドを使用して、実行中のポッドまたはノードに動的に接続できます。

クラウド仮想マシンの並行リストア

NetBackup 11.2 では、クラウド仮想マシンの並行リストアが導入されており、リストア時間が短縮されます。ディスクを 1 つずつリストアする代わりに、NetBackup は複数のディスクを同時にリストアできます。これにより、リストアのパフォーマンスが向上し、特に複数のディスクを備えた仮想マシンの場合に、リカバリをより迅速に完了できます。この機能は AWS と Microsoft Azure でサポートされ、デフォルトで有効になっています。

詳しくは、『NetBackup™ Web UI クラウド管理者ガイド』を参照してください。

DENY_ALL ネットワークポリシーを使用した Azure ディスクの保護のサポート

NetBackup Snapshot Manager では、DENY_ALL ネットワークアクセスポリシーを使用する Azure 管理対象ディスクの保護をサポートしています。

この機能を有効にすると、NetBackup はバックアップ操作とスナップショット操作中に必要なディスクアクセスリソースとプライベートエンドポイントを自動的に作成して管理します。これにより、手動設定が不要になり、安全なディスクの保護が簡略化されます。詳しくは、『NetBackup Snapshot Manager for Cloud のインストールおよびアップグレードガイド』を参照してください。

Oracle ポリシーおよび MS-SQL-Server ポリシーのジョブの耐性

NetBackup 11.2 では、Oracle ポリシーと MS-SQL-Server ポリシーに関して耐性バックアップジョブが導入されています。プライマリサーバーへの接続が失われた場合、バックアップは、失敗したアクティビティが成功するまで、または設定されたタイムアウトに達するまで、そのアクティビティを再試行します。

タイムアウトに達すると、ジョブは失敗としてマーク付けされます。ポリシーに関連付けられているストレージユニットは、NetBackup 11.2 以降を実行しているメディアサーバーをターゲットにする必要があります。

これらのジョブでは、多重化はサポートされません。

新しい耐性バックアップ設定については、『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』を参照してください。

KVM サポートに関する拡張機能

NetBackup for KVM は、アクセラレータ、単一ファイルのリストア (SFR)、raw フォーマットディスク、ブロックタイプディスクをサポートしています。

『NetBackup™ for KVM 管理者ガイド』を参照してください。

SAP HANA インテリジェントポリシー

SAP HANA インスタンスとデータベースを保護するインテリジェントポリシーを構成できます。

『NetBackup™ for SAP 管理者ガイド』を参照してください。

役割の昇格機能

役割の昇格により、NetBackup の権限を持つユーザーは、権限を一時的に昇格して、通常は制限されている管理またはセキュリティ上重要な操作を実行することができます。

この機能は、ユーザーに強力な役割を永続的に付与する必要性を排除することで、最小限の権限の原則をサポートします。

『NetBackup Web UI バックアップ管理者ガイド』を参照してください。

Web UI を使用した KMS の構成と管理

NetBackup Web UI を使用して、キー管理サーバー (KMS) を構成および管理できます。

キーグループとキーを KMS サーバーに追加すると、ストレージサーバーでバックアップデータの暗号化と復号にキーグループとその有効なキーを使用できます。

『NetBackup Web UI バックアップ管理者ガイド』を参照してください。

Web UI のトラブルシュータ

Web UI の[アクティビティモニター (Activity monitor)]、[トラブルシュータ (Troubleshooter)]を使用して、ジョブのエラーをトラブルシューティングできます。トラブルシュータ UI を使用して、特定の NetBackup 状態コードに対するエラーの詳細や推奨処置などのトラブルシューティング情報を参照できます。

『NetBackup Web UI バックアップ管理者ガイド』を参照してください。

EEB 管理 Web UI の拡張機能

NetBackup Web UI を使用して、エンジニアリングバイナリ (EEB) を大規模に管理できます。複数のクライアントとメディアサーバーから EEB を削除し、既存の EEB を更新できます。

『NetBackup Web UI バックアップ管理者ガイド』を参照してください。

操作上の注意事項

この章では以下の項目について説明しています。

- [NetBackup 11.2 の操作上の注意事項について](#)
- [NetBackup のインストールとアップグレードの操作上の注意事項](#)
- [NetBackup 管理インターフェースの操作上の注意事項](#)
- [NetBackup Bare Metal Restore の操作上の注意事項](#)
- [NetBackup クラウドオブジェクトストアの作業負荷の操作上の注意事項](#)
- [NetBackup NAS の操作上の注意事項](#)
- [NetBackup クラウド作業負荷の操作上の注意事項](#)
- [NetBackup の国際化と日本語化の操作に関する注意事項](#)
- [Helios との NetBackup の統合 - 操作上の注意事項](#)
- [Sheltered Harbor 接続エラー](#)

NetBackup 11.2 の操作上の注意事項について

NetBackup の操作上の注意事項は、NetBackup のマニュアルセットまたは Cohesity のサポート Web サイトのどこにも文書化されない可能性のある NetBackup のさまざまな操作に関する重要な点について説明したものです。操作上の注意事項は、NetBackup の各バージョンに対応する形で『NetBackup リリースノート』に記載されます。通常、操作上の注意事項には、既知の問題、互換性の問題、およびインストールとアップグレードに関する追加情報が含まれます。

操作上の注意事項は、NetBackup のバージョンがリリースされた後に追加または更新されることがよくあります。この結果、オンラインバージョンの『NetBackup リリースノート』またはその他の NetBackup マニュアルは、リリース後の更新となる場合があります。の指

定のリリースに関する最新版のマニュアルセットには、ベリタスのサポート Web サイトの次の場所でアクセスできます。NetBackupCohesity

NetBackup のリリースノート、管理者ガイド、インストールガイド、トラブルシューティングガイド、スタートガイド、ソリューションガイド

NetBackup のインストールとアップグレードの操作上の注意事項

NetBackup は、さまざまな方法を使って異機種混合環境でインストールしたり、アップグレードしたりすることができます。NetBackup は、同一環境で混在しているさまざまなリリースレベルの NetBackup サーバーとクライアントとも互換性があります。このトピックでは、NetBackup 11.2 のインストール、アップグレード、ソフトウェアパッケージに関連する操作上の注意事項と既知の問題について説明します。

Windows で NetBackup 11.2 のアップグレードが失敗した場合に以前のログフォルダ構造に戻す

root 以外または管理者以外で起動したプロセスのログについて、レガシーログフォルダ構造が変更されました。新しいフォルダ構造は、プロセスログディレクトリ名の下に作成されます。詳しくは、『[NetBackup ログリファレンスガイド](#)』のレガシーログのファイル名形式に関するセクションを参照してください。

Windows の場合、NetBackup 11.2 へのアップグレードが失敗してロールバックが発生した場合は、次のコマンドを実行して、以前のバージョンの NetBackup での作業を続行します。

```
mklogdir.bat -fixFolderPerm
```

詳しくは、『[NetBackup コマンドリファレンスガイド](#)』で mklogdir コマンドの説明を参照してください。

ネイティブインストールの要件

NetBackup 8.2 で初期インストールが変更され、現在は応答ファイルが必要です。この変更は、ネイティブパッケージを使用して VM テンプレートを作成する、または製品を構成せずに NetBackup パッケージをインストールする必要があるユーザーに悪影響を及ぼす場合があります。Linux では、以前の動作を実現する方法の 1 つとして、RPM パッケージマネージャの `-noscripts` オプションを使用できます。VRTSnbpcck パッケージのインストール時にこのオプションを指定すると、構成の手順を回避できます。このオプションは、その他のパッケージをインストールする場合に指定する必要はありません。この場合でも応答ファイルは存在する必要がありますが、指定する必要がある値は、マシンのロール (クライアントまたはメディアサーバーのいずれか) のみです。次に例を示します。

```
echo "MACHINE_ROLE=CLIENT" > /tmp/NBInstallAnswer.conf  
rpm -U --noscripts VRTSnbpcck.rpm  
rpm -U VRTSnbpcx.rpm VRTSnbclt.rpm VRTSpddea.rpm
```

NetBackup サーバーで RFC 1123 と RFC 952 に準拠したホスト名を使用する必要がある

NetBackup 8.0 以降では、すべての NetBackup サーバー名に RFC 1123 (「Requirements for Internet Hosts - Application and Support」) と RFC 952 (「DOD Internet Host Table Specification」) の規格に準拠するホスト名を使用する必要があります。これらの規格には、ホスト名に使用できる文字と使用できない文字が規定されています。たとえば、ホスト名にアンダースコア文字 (_) は使用できません。

これらの規格とこの問題に関して詳しくは、次の資料を参照してください。

[RFC 952](#)

[RFC 1123](#)

<https://support.cohesity.com/s/article/article-100033400>

これらの規格は、すべての NetBackup ホストを含む、すべての計算ホストに適用する必要があります。レガシーの環境と機能に対応するため、2010 年より前に実装された NetBackup 機能では、一部の準拠しない文字が引き続き許可されます。ただし、これより新しい機能や最近統合されたサードパーティコンポーネントは、業界規格に準拠しないホスト名についてテストされておらず、このようなホスト名との互換性はない可能性があります。

状況によっては、規格に準拠するネットワークホスト名のエイリアスでネームサービスを構成し、NetBackup を構成するときにエイリアスを使用できる場合があります。ただし、すべての機能との互換性が確実なのは、規格に準拠するホスト名を使用した場合です。

HP-UX Itanium vPars SRP のコンテナのサポートについて

Hewlett-Packard Enterprise (HPE) は、HP-UX Virtual Partitions (vPars) 対応サーバーに Secure Resource Partitions (SRP) という新しいタイプのコンテナを導入しました。SRP で導入されたセキュリティ変更の一部として、swinstall や swremove などのネイティブ HP-UX インストールツールの SRP 環境内での実行は無効です。swinstall と swremove ツールは vPars を実行しているグローバルホストからのみ呼び出すことが可能で、SRP コンテナにネイティブパッケージをプッシュインストールします。

NetBackup はグローバルビューへのインストールのみをサポートします。HPE Itanium SRP コンテナ (プライベートファイルシステム、共有ファイルシステムまたは作業負荷) へのインストールを試行すると、NetBackup のインストールが失敗します。

NetBackup がインストールされるデフォルトパスの変更

NetBackup 11.1 以降、NetBackup がインストールされるデフォルトパスは次のとおりです。

C:\Program Files\Cohesity NetBackup\NetBackup

NetBackup 11.0.0.1 以前のバージョンのデフォルトインストールパスは次のとおりです。

C:\Program Files\Veritas

クラスタでは、すべてのクラスタノードのインストールパスが同じであることを確認する必要があります。NetBackup 11.0.0.1 以前から NetBackup 11.1 にアップグレードする場合は、古いクラスタノードのデフォルトインストールパスを確認し、追加する新しいノードに同じパスを使用する必要があります。

たとえば、古いクラスタノードにデフォルトインストールパスがある場合は、アップグレード後に新しいノードのインストールパスとして C:\Program Files\Veritas を使用する必要があります。

MongoDB Ops Manager のアップグレード動作

NetBackup 11.2 以降にアップグレードした後:

- アップグレード前に作成された既存の MongoDB Ops Manager ポリシーとバックアップイメージは、引き続き利用でき、変更されません。
- 既存の MongoDB Ops Manager ポリシーに差分増分バックアップ形式が含まれている場合、そのバックアップ形式はアップグレード後に増分バックアップとして実行されます。
- oplog バックアップ (NetBackup 11.2 以上でトランザクションログ (TLOG) バックアップと呼ばれる) の実行を続行するには、既存の MongoDB Ops Manager ポリシーを手動で更新し、差分増分バックアップ形式をトランザクションログ (TLOG) に変更する必要があります。
- アップグレード前に作成された Oplog バックアップイメージは、リストアビューに差分増分バックアップイメージとして引き続き表示されます。
- NetBackup 11.2 以降を使用して作成された Oplog (トランザクションログ/TLOG) バックアップイメージは、リストアビューにトランザクションログのバックアップイメージとして表示されます。

MongoDB Ops Manager トランザクションログ (TLOG) のバックアップの継続性に関する注意事項

MongoDB Ops Manager のトランザクションログ (oplog) のバックアップは、継続的な oplog メタデータを使用して、指定した時点へのリカバリをサポートします。NetBackup

は、バックアップおよびリストア操作中に **oplog** の継続性を検証して、リカバリの一貫性を確保します。

oplog または増分バックアップが失敗した場合、指定した時点へのリカバリに必要な **oplog** チェーンの継続性が損なわれる可能性があります。

MongoDB Ops Manager のログは、次のようなメッセージを報告することがあります。

- **oplog** ファイルの非連続セットが発生しました (Observed non-continuous sets of oplog files)
- この **oplog** ファイルセットでギャップの重複が発生しました (Gap overlap observed for this set of oplog files)

影響

- **oplog** または増分バックアップが失敗した後に、後続の **oplog** または増分バックアップ (再試行操作や自動再試行操作を含む) が成功したことを報告することがあります。ただし、それより前に **oplog** の継続性に問題が生じた場合、正常に完了しても、指定した時点でのリカバリが可能であるということにはなりません。
- したがって、新しい完全バックアップが実行されるまで、影響を受けるバックアップチェーンは、ログベースの (指定した時点への) リカバリには使用できません。
- スナップショットベースのリストア (ログなしの完全または増分) は引き続き利用できます。

操作上のガイダンス

oplog または増分バックアップの失敗が発生した場合、以下のように対処してください。

- 1 現在の完全バックと **oplog** バックアップのチェーンを、指定した時点でのリカバリに利用できないものとして扱います。
- 2 新しい完全バックアップを実行して、新しいリカバリの基準を確立します。
- 3 MongoDB Ops Manager のログに、**oplog** の継続性または保持に関する警告がないか確認します。
- 4 **oplog** の保持サイズを検証し、バックアップスケジュールが、所要のリカバリ期間に適合していることを確認します。

警告: NetBackup は **oplog** の継続性を検証しますが、MongoDB **oplog** メタデータの生成、修復、調整は行いません。ログベースのリカバリを正常に実行するには、MongoDB Ops Manager による継続的な **oplog** の保持と正確なメタデータレポートが必要です。

NetBackup 管理インターフェースの操作上の注意事項

NetBackup 管理者には、NetBackup の管理に使用できる複数のインターフェースの選択肢があります。すべてのインターフェースには同様の機能があります。このトピックでは、NetBackup 11.2 のこれらのインターフェースに関する操作上の注意事項と既知の問題について説明します。

個々の NetBackup 管理インターフェースについて詳しくは、『NetBackup Web UI 管理者ガイド』または『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』を参照してください。

インターフェースをインストールする方法については、『NetBackup インストールガイド』を参照してください。管理コンソールとプラットフォームの互換性については、Cohesity のサポート Web サイトにある各種の NetBackup 互換性リストを参照してください。

p.60 の「[NetBackup の互換性リストと情報について](#)」を参照してください。

NetBackup 管理コンソールの X フォワーディングで断続的に問題が発生する

NetBackup 管理コンソールの X フォワーディングにおいて、断続的に問題が発生する場合があります。この動作は、X フォワーディングを使用するときのみ発生します。この問題は、ローカルコンソールでは発生しません。問題の多くは Linux サーバーにおいて発生しますが、それに限定されるものではありません。この問題は、一般的には Xming や XBrowser などの古いバージョンの X ビューアが使用されたときに発生します。

MobaXterm を使用すると、問題の発生を最小限に抑える、または問題を解消できるとも考えられます。X フォワーディングで問題が発生した場合には、X ビューアをアップグレードして同じ操作を試みるか、またはローカルコンソールからサーバーにアクセスしてください。

Solaris 10 Update 2 以降がインストールされている Solaris SPARC 64 ビットシステムで簡体中国語 UTF-8 ロケールを使用すると、NetBackup 管理コンソールでエラーが発生する

Solaris 10 Update 2 以降がインストールされている Solaris SPARC 64 ビットシステムで簡体中国語 UTF-8 ロケールを使うと、NetBackup 管理コンソールのコアダンプの問題が発生する場合があります。詳しくは、Oracle 技術ネットワーク Web サイトで次の URL からバグ ID 6901233 を参照してください。

http://bugs.sun.com/bugdatabase/view_bug.do?bug_id=6901233

この問題が発生した場合は、Oracle が提供する Solaris のパッチまたはアップグレードを適用し、この問題を修復してください。

Web サービスの再起動後にログ収集をキャンセルできない

ログ収集の進行中に NetBackup Web サービスが再起動された場合、NetBackup Web UI からログ収集をキャンセルすることはできません。

これは、すでに実行されていたログ収集要求が Web サービスの再起動後に保持されないために発生します。その結果、Web UI の[キャンセル (Cancel)]オプションに[エンティティが見つかりません (No Entity Found)]というエラーメッセージが表示されます。

回避方法: NetBackup コマンドラインを使用して、ログ収集をキャンセルできます。

```
./nblogadm --action cancelcollection --recid {collectionId} --api
```

NetBackup Bare Metal Restore の操作上の注意事項

NetBackup Bare Metal Restore (BMR) では、サーバーのリカバリ処理が自動化され簡素化されるため、オペレーティングシステムの再インストールまたはハードウェアの構成を手動で実行する必要がなくなります。このトピックでは、NetBackup 11.2 の BMR に関する操作上の注意事項と既知の問題について説明します。

PIT リストア後[ホスト ID が存在しません (The host ID does not exist)]というエラーが表示される

指定した時点 (PIT) のリストア操作 (完全ファイルシステムリストアまたは BMR リストアのいずれかが含まれる場合がある) が実行された後、エラーメッセージ[ホスト ID が存在しません (The host ID does not exist)]が表示されます。

このシナリオでは、root または管理者アカウントとして SERVICE_USER が構成されている場合に完全バックアップが実行されます。このアカウントは、root または管理者の所有権を持つ NetBackup のインストール済みバイナリのバックアップを取得します。

リストアの前に、root または管理者以外のアカウントで SERVICE_USER が構成され、サービスユーザーが bp.conf の一部としてバックアップされる増分バックアップが取得されます。増分バックアップによる PIT リストア操作では、SERVICE_USER エントリがリストアされます。ただし、バイナリは root アカウントの所有権でリストアされます。

回避方法

サービスユーザーを変更した後、ファイルシステムの MS-Windows¥Standard Policy か BMR ポリシー構成かにかかわらず、完全バックアップを作成する必要があります。

Linux クライアントでの BMR リストア後に NetBackup サービスが自動的に起動しないことがある

Linux クライアントで BMR (Bare Metal Restore) のリストア操作を実行した後、NetBackup サービスが自動的に起動しないことがあります。

BMR リストア操作後に NetBackup サービスがしばらく実行され、BMR のリストア後のスクリプトが正常に完了する場合があります。しかし、その後で NetBackup サービスが停止することがあります。

この問題は、サービスユーザーが、NetBackup Linux クライアントで定義されている root ユーザーと異なる場合にのみ発生します。

回避方法

Linux クライアントで NetBackup サービスを手動で起動します。

サービスを起動するには、次のコマンドを実行します。

```
/usr/opensv/netbackup/bin/bp.start_all
```

Windows 2025 クライアントのリストア時に AWS で NetBackup Bare Metal Restore がハングアップする

AWS では、Windows 2025 はデフォルトで NVMe ディスクを使用します。Bare Metal Restore は NVMe ディスクをサポートしていません。

回避方法:

この問題の回避方法はありません。

Windows BMR DDR のリストア後に、ミラー化されたダイナミックボリュームがドライブ文字を受信しないことがある

Dissimilar Disk Restore (DDR) を使用する Windows Bare Metal Restore (BMR) 環境では、ミラー化された (RAID-1) ダイナミックボリュームがリストア後にドライブ文字を自動的に受信しない場合があります。この動作は、ディスクの再構築およびシステムの起動時に Windows ディスク管理と DDR がダイナミックディスクを処理する方法が原因だと予想されます。

原因

BMR DDR のリストアの間、ディスクとボリュームの再構築はドライブ文字の割り当てよりも優先されます。BMR プロセスでは、ディスクレイアウト、パーティション構造、ダイナミックディスクのメタデータのリストアに重点が置かれています。非システムボリュームのドライブ文字は、この段階では再割り当ては保証されていません。

リストア後に、ミラー化されたダイナミックボリュームは次の状態で表示される可能性があります。

- 再同期中 (Resynching)
- 縮退 (Degraded)
- 正常 (Healthy) (ドライブ文字が割り当てられていない)

Windows では、ドライブ文字の割り当てではダイナミックミラーが完全に認識されて安定化されるまで遅れる場合があります。さらに、ブート中に元のドライブ文字がすでに予約されている、一時的に割り当てられている、または別のボリュームと競合している場合、Windows では衝突を避けるために文字の割り当てを保留することがあります。

ハードウェアの相違、ディスク順序の変更、その他マッピングの差異が関係する DDR シナリオでは、システムボリューム (C:) のみが自動マッピングを保証されています。他のボリュームは、正常にリストアされてもマウントが解除されたままの場合があります。[ディスクの管理]では通常、ミラー化されたボリュームは次のように表示されます。

- 正常
- ダイナミック
- ドライブ文字なし

ボリュームにはアクセスできますがマウントされていません。また、ドライブ文字を手動で割り当てするまではアプリケーションが失敗する場合があります。

回避方法

システムブート後、以下のように Windows ディスク管理を使用してドライブ文字を手動で割り当てます。

1. [ディスクの管理]を開きます。
2. ミラー化されたボリュームを右クリックします。
3. [ドライブ文字のパスの変更]を選択します。
4. 目的のドライブ文字を割り当てます。

文字が割り当てられると、ボリュームは完全に機能するようになります。再構築、再フォーマット、追加のリストア操作は不要です。

Windows での ReFS ボリュームの BMR リストアエラー (2016 ~ 2025)

原因

Windows Server 2016、2019、2022、2025 の Bare Metal Restore (BMR) 中、ReFS ボリュームのリストアに失敗し、「フォーマットされていない」状態で表示されます。

これは、ReFS バージョン間の非互換性が原因で、ReFS ボリュームのベアメタルリストアまたはブロックレベルリストアをサポートする ADK/WinPE のバージョンがないために発生します。

インストールされているオペレーティングシステムで使用されている ReFS バージョン

表 3-1

Windows バージョン	ReFS バージョン
Windows Server 2016	3.1
Windows Server 2019	3.4
Windows Server 2022	3.7
Windows Server 2025	3.14

SRT/WinPE 環境の ReFS バージョン

表 3-2

環境	ReFS バージョン
SRT/ADK WinPE	3.9

重要な互換性に関する注意事項

WinPE ReFS ドライバ (3.9) は、ダウングレードしたり、OS 固有の ReFS バージョン (3.1、3.4、3.7、3.14) と下位互換にすることはできません。

Microsoft 社はこのダウングレード制限に対する回避方法を提供していません。

その結果、次の問題が発生します。

- リストアされた ReFS ボリュームがフォーマットされていない状態で表示される
- 対象の OS が WinPE で作成された ReFS 3.9 メタデータを読み取ることができない
- BMR リストア後にボリュームが使用不能になる

原因

ReFS バージョンは、メタデータレベルでは下位互換性がありません。

重要なルール:

- 下位の ReFS ドライバは、上位バージョンからメタデータを再作成または再生できません
- WinPE の ReFS ドライバは読み取り専用で、再構築用には設計されていません

- BMR リストアには、メタデータの再生、割り当てマップ、および整合性ストリーム処理 (バージョンの不一致で失敗する操作) が必要です

互換性マトリックス

以下のすべての組み合わせは、バージョンの不一致が原因で失敗します。

表 3-3

ソースボリューム (ReFS)	対象の OS	WinPE ReFS (3.9)	結果
3.14 (Windows 2025)	Server 2025	3.9	失敗
3.7 (Winodws 2022)	Server 2022	3.9	失敗
3.4 (Winodws 2019)	Server 2019	3.9	失敗
3.4 (Windows 2016)	Server 2016	3.9	失敗

失敗の原因は次のとおりです。

- WinPE で必要な ReFS メタデータ構造を作成できない
- バージョンの不一致によりメタデータ再生が妨げられる
- リストアツールがサポート外の API にフォールバックされる

解決方法

直接の解決方法はありません。

Microsoft 社は、BMR ワークフロー中に ReFS のバージョンをアップグレードまたはダウングレードする方法を提供していません。

回避方法

元のオペレーティングシステムと一致する正しい 3.x バージョンで ReFS ボリュームを確実にリストアするには、次の手順を実行します。

1. BMR 構成を右クリックし、新しいクライアントの構成を使用してコピーを作成します。
2. コピーした構成を編集し、ボリュームマッピングからすべての ReFS ボリュームを除外します。
3. [リストア準備 (Prepare to Restore)]を実行し、システムのリストアに進みます。
4. リストアされたオペレーティングシステムでマシンをブートした後、次の手順を実行します。
 - 手順 2 で除外した ReFS ボリュームを作成します
 - ディスクの管理または DISKPART を使用してフォーマットします

- Windows は、その OS の適切なバージョンを使用して ReFS ボリュームを自動的に作成します
- 5. 次に使用して ReFS バージョンを確認します: `fsutil fsinfo refsinfo`
`<DriveLetter:>`
- 6. NetBackup Web UI の[リカバリ (Recovery)]タブからこれらのボリュームのデータをリストアします。

Bare Metal Restore (BMR) 操作後、Windows の[スタート]メニューと検索が機能しない

問題

Bare Metal Restore (BMR) 操作後、Windows の[スタート]メニューと検索が機能しません。

この動作は、Windows Server 2019 (2K19) EFI クライアントで発生しています。

原因

最も考えられる原因は、リカバリ処理中に AppX 状態リポジトリデータベースが適切に更新されなかったことです。

アプリケーションファイルが正常にリストアされた一方、システムの内部登録データベースが同期されなかったため、組み込みの Windows コンポーネントの初期化中にエラーが発生しました。

解決方法

Appx Package の登録に関する Microsoft 社のマニュアルと推奨事項に従います。

公式のマニュアルとは別に、登録に関連する不整合の解決に次の手順が役立つ場合があります。

リカバリ手順

- 1 管理者として PowerShell を開きます。
- 2 次のコマンドを実行します。

```
Get-AppXPackage -AllUsers | Foreach {
    Add-AppxPackage -DisableDevelopmentMode -Register
    "$($_.InstallLocation)¥AppXManifest.xml"
}
```

このコマンドは、それぞれの AppXManifest.xml ファイルを読み込み、関連する登録データを再構築することで、インストールされているすべての AppX パッケージを再登録します

機能への影響

このコマンドを実行すると、次の操作が実行されます。

- ユーザープロファイル全体にインストールされているすべての **AppX** パッケージを列挙する
- 各 AppXManifest.xml を解析する
- パッケージのアクティブ化と ID マッピングを再構築する
- **Windows State Repository** のパッケージを再インデックス付けする
- 必要なセキュリティ識別子 (**ALL APPLICATION PACKAGES**を含む) を再適用する
- **AppX** 配備メタデータを再構築する

このプロセスは、**AppX** パッケージの登録の不一致と、関連するシェルの初期化の問題を解決するのに役立ちます。

登録後の操作

再登録が完了したら、次の手順を実行します。

- **explorer.exe** プロセスを再起動して **Windows** シェルを再起動し、更新済みの登録が適用されるようにします。

前提条件と検証チェック

AppX パッケージの再登録を実行する前に、次のことを確認します。

AppLocker の構成

- **AppLocker** 拒否ルールがパッケージ化されたアプリケーションをブロックしていないことを確認します。
- **secpol.msc** を開き、Application Control Policies → **AppLocker** に移動します。
- パッケージ化されたアプリの実行を拒否するルールがないことを確認します。

必要なディレクトリ

次のディレクトリが存在することを確認します。

- C:\Windows\System32\AppLocker
- C:\Windows\AUInstallAgent

見つからない場合は作成します。

これらのディレクトリがすでに存在する場合は削除しないでください。

AppReadiness ディレクトリ

- C:\Windows\AppReadiness が存在することを確認します。

- 見つからない場合は、ディレクトリを作成します。

この場所は、AppX ステージング操作に必要です。

レジストリの検証

- HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Microsoft¥Windows¥CurrentVersion¥Appx に移動します。
- **PackageRoot** レジストリ値が C:¥Program Files¥WindowsApps を指していることを確認します。

オプションのサービスの再起動

必要に応じて、パッケージの再登録の前または後に AppX 配備サービスを再起動します。

```
Restart-Service AppXSVC -Force
```

公式のエラーコンテキスト

- **0x80073CF9** (インストールに失敗しました):「ステージング操作を完了できなかったためパッケージ配備に失敗しました」と公式に定義されています。

BMR シナリオの場合:

これは通常、次のことを示します。

ステージング操作は、**Windows** が状態リポジトリにコミットする前にアプリケーションを準備するプロセスです。

- **AppReadiness** ディレクトリが見つかりません
- **AUInstallAgent** ステージングディレクトリが見つかりません
- ディレクトリ権限が正しくない
- **0x80070003** (パスが見つかりません):「配備ターゲットアクセスのエラー」と公式に言及されています。

BMR シナリオの場合:

これにより、ストリップされた **SID** または不適切な **SID** が原因で、見つからないかアクセス不能の可能性があることが確認されます。

これは、データベースに登録参照が含まれているが、物理ディレクトリ構造が見つからないかアクセス不能であることを示します。

- **AppX** データベースが必要なディレクトリ構造を見つけることができません
- C:¥Windows¥SystemApps または
- C:¥Program Files¥WindowsApps

Windows Bare Metal Restore の後に、ごみ箱の破損に関する警告が発生する

問題

Windows クライアントで Bare Metal Restore (BMR) を実行すると、ログイン後またはデスクトップにアクセスしたときに、次の警告メッセージが表示されることがあります。

エラーメッセージ

The Recycle Bin on C:¥ is corrupted. Do you want to empty the Recycle Bin for this drive?

- [はい (Yes)]が選択されるまで、プロンプトが表示され続けます。
- この警告は、C:ドライブだけでなく、リストアされたシステムに存在する各ドライブに対して表示される場合があります。
- 非表示のシステムフォルダ \$Recycle.Bin と System Volume Information がすべてのドライブで表示される場合があります。
- このメッセージは、ごみ箱にユーザーデータが含まれていない場合でも表示される場合があります。

原因

この問題は、Bare Metal Restore プロセス中に、\$RECYCLE.BIN フォルダが完全に同期されていないか、正しく再初期化されないことが原因で発生します。

この動作は表面的なものであり、オペレーティングシステムまたは復元されたユーザーデータの破損を示すものではありません。

解決方法

この問題は、影響を受けるボリュームのごみ箱フォルダを再作成することで解決できます。

問題を解決するための手順:

- 1 リストアされたシステムにログインします。
- 2 管理者権限でコマンドプロンプトを開きます。
- 3 影響を受ける各ドライブに対して次のコマンドを実行します。

```
RD C:¥$Recycle.bin /s /q
```

メモ: 他のボリュームも影響を受ける場合は、C: を適切なドライブ文字に置き換えてください。

- 4 システムを再起動します。

追加情報

- リストアされた各 NTFS ボリュームのルートに対するフルコントロール権限がシステムアカウントにあることを確認します。
- この問題は、ごみ箱以外のシステム機能やデータ整合性には影響を与えません。
- プロンプトを受け入れて削除されるデータは、ごみ箱の内容のみに限られます。

データのリカバリ

バックアップ時にごみ箱に存在したデータは、リダイレクトリストアを使用してリカバリできます。

- 1 NetBackup コンソールの[リカバリ (Recovery)]タブに移動します。
- 2 影響を受ける Windows クライアントを選択します。
- 3 次のパスを参照します。
`C:\¥$RECYCLE.BIN`
- 4 「\$RECYCLE.BIN」フォルダを選択します。
- 5 5. [すべてを元の場所にリストア (Restore everything to original location)]を選択し、リストアを開始します。データはごみ箱の中にリストアされます。

追加情報

- リストアされた各 NTFS ボリュームのルートに対するフルコントロール権限がシステムアカウントにあることを確認します。
- この問題は、ごみ箱以外のシステム機能やデータ整合性には影響を与えません。
- プロンプトを受け入れて削除されるデータは、ごみ箱の内容のみに限られます。

LVM PV が RAW ディスクに作成された場合、BMR の後にシン論理ボリュームがリストアされない

問題

LVM シンプロビジョニングを使用して Linux クライアントの NetBackup Bare Metal Restore (BMR) が正常に完了した後、システムブート後にシン論理ボリューム (シン LV) が消失したり、使用できなくなったりします。

BMR リストアジョブは致命的エラーなしで完了しますが、シンプロビジョニングされた論理ボリュームに格納されているデータは、リストアまたはマウントされません。

この動作は、LVM 物理ボリューム (PV) がパーティションベースのデバイス (/dev/sdb1 など) ではなく RAW ディスク (/dev/sdb など) に直接作成された場合に発生します。

環境

- 製品: Veritas NetBackup Bare Metal Restore (BMR)
- クライアント OS: Linux (RHEL 9.x など)
- ストレージの構成
 - LVM シンプロビジョニング
 - RAW ディスク上に作成された物理ボリューム (ディスクパーティションなし)
- リストア形式: Bare Metal Restore (BMR)

現象

BMR リストアが完了し、システムが再ブートした後:

- シンプルは存在する場合がありますが、次のようになります。
 - シン論理ボリュームが存在しない、または
 - ファイルシステムが存在しない、または
 - ボリュームがマウントされていない、または
 - マウントされたボリュームが空である
- BMR リストアジョブ中に致命的エラーが報告されません

原因

BMR リストアワークフローは、物理ボリュームが RAW ディスク上に直接作成される、シンプロビジョニングされた LVM 構成を完全にはサポートしません。

BMR リストアロジックでは、シンプロビジョニングがパーティションベースの PV によってバックアップされることを想定しています。RAW ディスクに PV を作成する場合、BMR は次のような動作になります。

- ボリュームグループとシンプルのメタデータを再作成する
- シン論理ボリュームを再作成またはデータ入力しない
- シン LV に含まれるファイルシステムデータをリストアしない

回避方法

警告: 次の手順では、シン論理ボリュームを削除して再作成します。正しく実行しないと、データが永続的に失われる可能性があります。LVM のレイアウトを理解していて、有効なバックアップがある場合にのみ実行してください。

前提条件

- ボリュームグループが存在する
- シンプルが存在する
- NetBackup バックアップに、シン論理ボリュームのデータが含まれている

リカバリ手順

- 1 シン論理ボリュームをマウント解除します (マウントされている場合)。

```
umount <MOUNT_POINT> 2>/dev/null
```

- 2 既存のシン論理ボリュームを削除します。

```
lvremove -y <VG_NAME>/<THIN_LV_NAME>
```

- 3 ボリュームグループ内の論理ボリュームを検証します。

```
lvs <VG_NAME>
```

- 4 シン論理ボリュームを再作成します。

```
lvcreate -V <VIRTUAL_SIZE> -T <VG_NAME>/<THINPOOL_NAME> -n  
<THIN_LV_NAME>
```

- 5 論理ボリュームを再び検証します。

```
lvs <VG_NAME>
```

- 6 シン論理ボリューム上にファイルシステムを作成します。

```
mkfs.xfs -f /dev/<VG_NAME>/<THIN_LV_NAME>
```

- 7 ブロックデバイスを検証します。

```
blkid /dev/<VG_NAME>/<THIN_LV_NAME>
```

- 8 マウントポイントを作成し、ボリュームをマウントします。

```
mkdir -p <MOUNT_POINT>  
  
mount /dev/<VG_NAME>/<THIN_LV_NAME> <MOUNT_POINT>
```

- 9 マウントを検証します。

```
df -lh
```

- 10 必要なデータの <MOUNT_POINT> へのリダイレクトリストアを実行します。

推奨されるベストプラクティス (強く推奨)

今後の BMR リストアでこの問題を防ぐには、次のようにします。

- データディスクにパーティションを常に作成する
- パーティションデバイスに LVM 物理ボリューム (/dev/sdb1 など) を作成する

- RAW ディスクに PV を直接作成することを避ける

状態

これは、RAW ディスクに作成されたシンプロビジョニング LVM 構成の現在の BMR リストアワークフローにおける既知の制限事項です。

文書化された回避策を使用して、シン論理ボリュームをリカバリし、データをリストアしてください。

NetBackup クラウドオブジェクトストアの作業負荷の操作上の注意事項

この項では、バージョン 11.2 の NetBackup クラウドオブジェクトストアの作業負荷に関する操作上の注意事項と既知の問題について説明します。

NetBackup 11.1 より前のバージョンからアップグレードした後の完全バックアップ

Amazon S3 では、一部の API と地域における所有者オブジェクトの表示名パラメータのサポートが廃止されています。この変更は NetBackup によるバックアップの識別方法に影響する場合があります。表示名パラメータが以前のバックアップから欠けている場合、NetBackup はバックアップを増分バックアップではなく新しいバックアップとして扱います。

回避方法:

回避方法はありません。アップグレード後、NetBackup は最初に完全バックアップを実行します。後続のバックアップは、ポリシーで構成されている場合、増分バックアップです。

次の点に注意してください。

- 11.1 より前のバージョンの NetBackup からアップグレードする場合、この動作を考慮します。
- アップグレード後の潜在的な完全バックアップに対応するために、バックアップスケジュールとストレージ容量を確認します。

バックアップホストとしての RHEL メディアサーバーのサポート対象バージョン

NetBackup 11.1.0.2 のクラウドオブジェクトストア作業負荷のバックアップホストとしてサポートされている RHEL メディアサーバーのバージョンは、RHEL 9.5 以前です。

NetBackup バージョン 11.2 の AIR (自動イメージレプリケーション) では NetBackup 10.2 以降が必要

NetBackup バージョン 11.2 があるコンピュータから、10.2 より前のバージョンの NetBackup があるターゲットコンピュータに対し、AIR (自動イメージレプリケーション) を実行することはできません。

回避方法:

なし。ターゲットコンピュータを NetBackup バージョン 10.2 以降にアップグレードします。

バックアップジョブが応答なくなり、一時的なステージング場所で大量の領域を消費する。

NetBackup クラウドオブジェクトストアのデータ保護機能では、ListObjects S3 API を使用してオブジェクトのリストを反復し、バケット内のオブジェクトをさらに読み取ってバックアップします。ListObjects S3 API は、キー名と NextContinuationToken に基づいて、1 つの要求につき最大 1,000 個のオブジェクトを辞書式順序で返します。この NextContinuationToken はページ分割に使用されます。たとえば、1 回の ListObjects S3 API 呼び出しで、1,000 個のオブジェクトの次のセットを取得し、新しい NextContinuationToken を使用して続くページを取得します。

Hitachi などの特定のクラウドオブジェクトストアプロバイダでは、オブジェクト名に特定の特殊文字が含まれていると NextContinuationToken が正しく動作せず、バックアップパフォーマンスが妨げられる可能性があります。

この動作により、一時的なステージング領域で NetBackup が使用する cos_sqlite データベースが中断されます。このデータベースには、進行中のバックアップジョブのオブジェクトリストが格納されます。この中断により、cos_sqlite データベースのサイズが大幅に増加し、一時的なステージング領域のディスク領域がいっぱいになります。これにより、NetBackup ジョブに時間がかかり、最終的に失敗します。

回避方法:

1. 各バッチの適切な値を返すために、ListObjects S3 API 呼び出しで NextContinuationToken を再構成します。
2. 既存のバックアップジョブを取り消し、バックアップを再実行します。

NetBackup NAS の操作上の注意事項

NetBackup Snapshot Manager および NDMP V4 スナップショット拡張機能を使用して、クライアントデータのスナップショットを NAS ホスト上に作成できます。NAS スナップショットは、ある特定の時点のディスクイメージです。ディスク上のスナップショットは、任意の期間保持できます。NetBackup のインスタントリカバリ機能を使用すると、ディスクから効率的にデータをリストアできます。多くの場合、NetBackup では、NAS-Data-Protection

ポリシーと NDMP ポリシーを使用して、NAS のスナップショットベースのデータ保護を実行できます。このトピックでは、NetBackup 11.2 の NetBackup NAS に関連する操作上の注意事項と既知の問題について説明します。

ファイルパスの親ディレクトリが NDMP 増分イメージに存在しないことがある

NetBackup のネットワークデータ管理プロトコル (NDMP) バックアップポリシーをバックアップ選択項目の `set type=tar` 指示句で設定している場合に、問題が起きることがあります。増分 NDMP バックアップが保存するファイルのパスの親ディレクトリはバックアップイメージに存在しない場合があります。この問題について詳しくは、ベリタス社のサポート Web サイトで次の TechNote を参照してください。Cohesity

<https://support.cohesity.com/s/article/article-100031122>

NetBackup クラウド作業負荷の操作上の注意事項

このトピックでは、バージョン 11.2 の NetBackup クラウド作業負荷に関する操作上の注意事項と既知の問題について説明します。

CMK を使用して暗号化されたディスクを持つ VM とその他の OCI 資産が、NetBackup UI で削除済みとしてマークされる。

OCI プロバイダの KMS サービスが停止している場合、CMK を使用して暗号化されたディスクを持つ VM とその他の OCI 資産が、NetBackup UI で削除済みとしてマークされます。KMS サービスがリストアされると、プラグインレベルの検出が正常に完了すると削除済みの状態は解除され、資産または VM がバックアップできるようになります。これ以外の操作は必要ありません。

回避方法:

OCI プロバイダ側の KMS サービスが実行中であることを確認します。

NetBackup の国際化と日本語化の操作に関する注意事項

このトピックでは、NetBackup 11.2 の国際化、日本語化、および英語以外のロケールに関する操作上の注意事項と既知の問題について説明します。

データベースおよびアプリケーションエージェントでのローカライズ環境のサポート

NetBackup データベースおよびアプリケーションエージェントの次のフィールドでは、ASCII 以外の文字がサポートされています。

- Oracle:
データファイルパス、表領域名、TNS パス
- DB2:
データファイルパス、表領域名
- SAP:
英語版 SAP は、ローカライズされた OS で動作します。(ローカライズされた SAP フィールドは特にありません。)
- Exchange:
メールボックス、添付ファイルの名前と内容、パブリックフォルダ、連絡先、カレンダー、フォルダ、データベースパス
- SharePoint:
サイトコレクション名、ライブラリ、サイトコレクション内のリスト
- Lotus Notes:
電子メールデータ (.nsf ファイル)
- Enterprise Vault (EV) エージェント:
ボルトストア、パーティション、データ
- VMware:
ユーザー名、パスワード、VM 表示名、データセンター、フォルダ、データストア、リソースプール、VApp、ネットワーク名、VM ディスクパス

特定の NetBackup ユーザー定義の文字列には非 US ASCII 文字を含めないようにする

NetBackup の次のユーザー定義の文字列には、非 US ASCII 文字を含めないようにする必要があります。

- ホスト名 (プライマリサーバー、メディアサーバー、Enterprise Media Manager (EMM) サーバー、ボリュームデータベースホスト、メディアホスト、クライアント、インスタンスグループ)
- ポリシー名
- ポリシーの KEYWORD (Windows のみ)
- バックアップ、アーカイブ、およびリストアの KEYWORD (Windows のみ)
- ストレージユニット名

- ストレージユニットディスクのパス名 (Windows のみ)
- ロボット名
- デバイス名
- スケジュール名 (Schedule Name)
- メディア ID
- ボリュームグループ名 (Volume group name)
- ボリュームプール名
- メディアの説明 (Media description)
- Vault ポリシー名
- Vault レポート名
- BMR 共有リソースツリー (SRT) 名
- トークン名
- ストレージライフサイクルポリシー (SLP) 名

Helios との NetBackup の統合 - 操作上の注意事項

メモ: 適用対象: Helios を介してアクセスする場合、NetBackup 11.2 以降

表 3-4 既知の制限事項とサポートされない操作

分野	制限事項	回避方法
レポート	Helios でテープの内容のレポートを利用できない	NetBackup Web UI を使用する
認証	SSO とスマートカードのユーザーがサポートされない	NetBackup Web UI 経由でログインする
ログの収集	収集したログのダウンロードが無効になる	NetBackup Web UI を使用する
リストア	ファイル/フォルダのダウンロードが無効になる	NetBackup Web UI を使用する
ファイル操作	大容量ファイルのダウンロードがサポートされない	NetBackup Web UI を使用する
ジョブの監視	更新がほぼリアルタイムであり、リアルタイムではない	NetBackup Web UI を使用する
セッション管理	ユーザーセッションを終了できない	NetBackup Web UI を使用する
API アクセス	Swagger ドキュメントを利用できない	NetBackup Web UI を使用する
MFA	MFA を構成できない	サポートされない

分野	制限事項	回避方法
API キー	API キーを追加できない	サポートされない
RBAC	Helios ユーザーを NetBackup RBAC に追加できない	サポートされない
更新	ローカルコンピュータからの EEB/パッチのアップロードが Helios で無効になる	NetBackup Web UI を使用する
クラウドの操作	スナップショットサーバー拡張機能の追加とクラウドエージェント操作の実行が Helios で無効になる	NetBackup Web UI を使用する

Sheltered Harbor 接続エラー

Sheltered Harbor プロジェクトは終了しました。そのため、NetBackup Sheltered Harbor ソリューションは、Sheltered Harbor 監視ログサービスに接続できません。

NetBackup ユーザーの SORT について

この付録では以下の項目について説明しています。

- [Cohesity Services and Operations Readiness Tools について](#)

Cohesity Services and Operations Readiness Tools について

Cohesity Services and Operations Readiness Tools (SORT) は、ベリタスエンタープライズ製品をサポートするスタンドアロンと Web ベースの強力なツールセットです。

NetBackup では、SORT によって、複数の UNIX/Linux または Windows 環境にまたがってホストの設定を収集、分析、報告する機能が提供されます。このデータは、システムで NetBackup の最初のインストールまたはアップグレードを行う準備ができているかどうかを評価するのに役立ちます。

次の Web ページから SORT にアクセスします。

<https://sort.veritas.com/netbackup>

SORT ページに移動すると、次のように多くの情報を利用可能です。

- インストールとアップグレードのチェックリスト
このツールを使うと、システムで NetBackup のインストールまたはアップグレードを行う準備ができているかどうかを確認するためのチェックリストを作成できます。このレポートには、指定した情報に固有のソフトウェアとハードウェアの互換性の情報がすべて含まれています。さらに、製品のインストールまたはアップグレードに関する手順とその他の参照先へのリンクも含まれています。
- Hotfix と EEB Release Auditor
このツールを使うと、インストールする予定のリリースに必要な Hotfix が含まれているかどうかを調べることができます。

- カスタムレポート
このツールを使うと、システムに関する推奨事項を取得できます。
- **NetBackup** のプラットフォームと機能の今後の予定
このツールを使うと、新しい機能や改善された機能に置き換えられることが予想される項目を確認できます。さらに、置き換わることなく廃止されることが予想される項目に関する情報も入手できます。これらの項目のいくつかには **NetBackup** の特定の機能、サードパーティ製品の統合、その他の製品の統合、アプリケーション、データベースおよび **OS** のプラットフォームが含まれます。

SORT ツールのヘルプが利用可能です。**SORT** ホームページの右上隅にある[ヘルプ (Help)]をクリックします。次のオプションがあります。

- 実際の本のようにページをめくってヘルプの内容を閲覧する
- 索引でトピックを探す
- 検索オプションを使ってヘルプを検索する

NetBackup のインストール要件

この付録では以下の項目について説明しています。

- [NetBackup のインストール要件について](#)
- [NetBackup に必要なオペレーティングシステムパッチと更新](#)
- [NetBackup 11.2 のバイナリサイズ](#)

NetBackup のインストール要件について

今回の NetBackup のリリースには、インストールに必要な最小システム要件と手順への変更が含まれている可能性があります。これらの変更は、Windows と UNIX の両方のプラットフォームの最小システム要件に影響します。『NetBackup リリースノート』のインストール指示に関する多くの情報は、利便性を考慮して提供されています。インストール指示について詳しくは、『NetBackup インストールガイド』および『NetBackup アップグレードガイド』に記載されています。

p.29 の「[NetBackup のインストールとアップグレードの操作上の注意事項](#)」を参照してください。

- NetBackup サーバーソフトウェアをアップグレードする前に、NetBackup カタログをバックアップして、カタログバックアップが正常に終了したことを確認する必要があります。
- NetBackup 11.2 にアップグレードする前に、NetBackup リレーショナルデータベースの 2 倍のサイズの空きディスク領域があることを確認します。つまり、プライマリサーバーのデフォルトインストールに対して、/usr/opensv/db/data (UNIX) または `<install_path>%Veritas%NetBackupDB\data` (Windows) のディレクトリを含むファイルシステムにそれだけの空き領域が必要です。これらのいずれかのディレクトリの一部のファイルの場所を変更する場合は、その場所にファイルのサイズ以上の空

き領域が必要です。代替の場所への NBDB データベースファイルの格納について詳しくは、『NetBackup 管理者ガイド Vol. 1』を参照してください。

メモ: この空きディスク領域の要件は、アップグレードを始める前に、カタログバックアップを正常に終了するためのベストプラクティスを実行していることを前提としています。

- プライマリサーバーとメディアサーバーでは、NetBackup を正常に実行するために、プロセス単位のファイル記述子の最小ソフト制限を 8000 にする必要があります。ファイル記述子の数が不十分な場合の影響の詳細については、Cohesity のサポート Web サイトの次の記事を参照してください。
<https://support.cohesity.com/s/article/article-100006242>
- NetBackup のプライマリサーバーとメディアサーバーは、起動時および 24 時間ごとにサーバーのバージョン情報を交換します。この交換は自動的に行われます。アップグレード後の起動時に、アップグレードされたメディアサーバーは vmd サービスを使って自身のバージョン情報をサーバーリストに示されているすべてのサーバーにブッシュします。
- Cohesity は、メディアサーバーのアップグレードの実行中は、プライマリサーバーのサービスを起動して利用可能な状態にしておくことをお勧めします。
- すべての圧縮ファイルは、UNIX/Linux システムで gzip を使用して圧縮されています。NetBackup をインストールする場合、事前に gunzip と gzip をホストにインストールする必要があります。これらのユーティリティは Windows ホストでは必要ありません。HP-UX を除くすべての UNIX プラットフォームでは、バイナリは /bin または /usr/bin に存在し、このディレクトリが root ユーザーの PATH 変数に含まれていると想定されています。HP-UX システムでは、gzip コマンドおよび gunzip コマンドは /usr/contrib/bin に存在すると想定されています。インストールスクリプトを実行すると、PATH 変数にこのディレクトリが追加されます。UNIX でインストールを正常に行うするには、これらのコマンドが存在する必要があります。

NetBackup に必要なオペレーティングシステムパッチと更新

NetBackup のサーバーおよびクライアントのインストールは、NetBackup のすべてのバージョンの互換性リストに一覧表示されているオペレーティングシステム (OS) の定義済みセットでのみサポートされます。ほとんどの OS ベンダーが、製品のパッチ、更新、およびサービスパック (SP) を提供しています。プラットフォームのテスト時には OS の最新の SP または更新レベルでテストすることが、NetBackup のクオリティエンジニアリングのベストプラクティスです。したがって、NetBackup はすべてのベンダー GA 更新 (n.1、n.2 など) または SPS (SP1、SP2 など) でサポートされます。ただし、既知の互換性の問題が特定の SP または更新された OS レベルに存在する場合、この情報は互換性リスト

で特定されます。このような互換性の問題が見られない場合、Cohesity は、サーバーとクライアントに最新の OS 更新をインストールしてから NetBackup をインストールまたはアップグレードすることをお勧めします。

NetBackup 11.2 およびその他の NetBackup リリースに関する最新の必須 OS パッチ情報は、[Cohesity SORT \(Services and Operational Readiness Tools\) Web サイト](#)および [NetBackup のすべてのバージョンの互換性リスト](#)で確認できます。互換性リストには、最新のメジャーリリースラインでの最小の NetBackup バージョンをサポートするために必要な最小の OS レベルに関する情報が含まれます。場合によっては、NetBackup の新しいリリースが特定のベンダーによる OS 更新またはパッチを必要とすることがあります。

p.60 の「[NetBackup の互換性リストと情報について](#)」を参照してください。

p.52 の「[Cohesity Services and Operations Readiness Tools について](#)」を参照してください。

NetBackup 11.2 のバイナリサイズ

次の表には、NetBackup 11.2 プライマリサーバー、メディアサーバー、およびサポートされているさまざまなオペレーティングシステム対応のクライアントソフトウェアに対する概算バイナリサイズが示されています。これらのバイナリサイズは、初回インストール後に製品が占有するディスク容量を示します。表に一覧表示されているサイズの場合、1 MB は 1,024 KB に相当します。

メモ: 表には、サポートされているオペレーティングシステムのみが表示されています。NetBackup が現在サポートしている最新のオペレーティングシステムのバージョンについては、[Services and Operations Readiness Tools \(SORT\) Web サイト](#)または [NetBackup のすべてのバージョンの互換性リスト](#)を参照してください。

表 B-1 互換性のあるプラットフォームの NetBackup のバイナリサイズ

OS	CPU アーキテクチャ	64ビットのクライアント	64 ビットのサーバー	注意事項
AIX	64 ビットのクライアント	1,530 MB	サポート終了	
Alma Linux		2,020 MB		
Amazon Linux		2,020 MB		
BC-Linux		2,020 MB		

OS	CPU アーキテクチャ	64ビットのクライアント	64 ビットのサーバー	注意事項
Canonical Ubuntu	x86-64	2,020 MB		
CentOS	x86-64	2,020 MB	7,534 MB	
Debian GNU/Linux	x86-64	2,020 MB		
Kylin Linux Advanced Server 10.0		2,020 MB		
NeoKylin Linux Advanced Server		2,020 MB		
Oracle Linux	x86-64	2,020 MB	7,534 MB	
Red Hat Enterprise Linux Server	POWER 8/9 クライアント	509 MB		
Red Hat Enterprise Linux Server	x86-64	2,020 MB	7,534 MB	
Red Hat Enterprise Linux Server	z/Architecture	718 MB	サポート終了	メディアサーバーまたはクライアントとの互換性のみ。
Rocky Linux クライアント		2,020 MB		
Solaris	SPARC	1,103 MB	サポート終了	
Solaris	x86-64	1,058 MB	サポート終了	
SUSE Linux Enterprise Server	POWER 8/9 クライアント	507 MB		
SUSE Linux Enterprise Server	x86-64	1,445 MB	6,776 MB	

OS	CPU アーキテクチャ	64ビットのクライアント	64 ビットのサーバー	注意事項
SUSE Linux Enterprise Server	z/Architecture	736 MB	サポート終了	メディアサーバーまたはクライアントとの互換性のみ。
Windows	x86-64	894 MB	5,109 MB	互換性のあるすべての Windows x64 プラットフォームが含まれます。

NetBackup の互換性の要件

この付録では以下の項目について説明しています。

- [About compatibility between NetBackup versions](#)
- [NetBackup の互換性リストと情報について](#)
- [NetBackup のライフサイクル終了のお知らせについて](#)

About compatibility between NetBackup versions

You can run mixed versions of NetBackup between primary servers, media servers, and clients. This back-level support lets you upgrade NetBackup one server at a time, which minimizes the effect on overall system performance.

NetBackup supports only certain combinations of servers and clients. In mixed version environments, certain computers must be the highest version. Specifically, the version order is: NetBackup Snapshot Manager computer, primary server, media server, and then clients. For example, the scenario that is shown is supported: 11.0 NetBackup Snapshot Manager > 10.2 primary server > 10.0 media server > 9.1.0.1 client.

All NetBackup versions are four digits long. The NetBackup 11.0 release is the 11.0.0.0 release. Likewise, the NetBackup 10.2 release is the NetBackup 10.2.0.0 release. For the purposes of supportability, the fourth digit is ignored. A 10.2 primary server supports a 10.2.0.1 media server. An example of what is not supported is a 10.2.0.1 primary server with a 11.0 media server.

The NetBackup catalog resides on the primary server. Therefore, the primary server is considered to be the client for a catalog backup. If your NetBackup configuration

includes a media server, it must use the same NetBackup version as the primary server to perform a catalog backup.

For complete information about compatibility between NetBackup versions, refer to the [Cohesity SORT website](#).

Review the [End of Support Life](#) information available online.

NetBackup の互換性リストと情報について

『NetBackup リリースノート』のドキュメントには、NetBackup のバージョン間で実施された大量の互換性の変更に関する記述が含まれています。ただし、プラットフォーム、周辺機器、ドライブ、ライブラリの最新の互換性情報は、NetBackup の Cohesity Operations Readiness Tools (SORT) Web サイトにあります。

p.52 の「[Cohesity Services and Operations Readiness Tools について](#)」を参照してください。

NetBackup では、SORT によって、インストールとアップグレードのチェックリストのレポートと、既存の複数の環境にわたりホストの設定を収集、分析、報告する機能が提供されます。さらに、ご使用の環境にインストールした Hotfix や EEB がどのリリースに含まれているかを特定できます。このデータを使って、システムで特定のリリースのインストールまたはアップグレードを行う準備ができていないか評価します。

NetBackup 互換性リスト

SORT に加えて、Cohesity はお客様がすぐに NetBackup の最新の互換性情報を参照できるようさまざまな互換性リストを提供しています。

[NetBackup のすべてのバージョンの互換性リスト](#)

メモ: 相互に互換性がある NetBackup のバージョンについて詳しくは、ソフトウェア互換性リスト (SCL)、SCL 内の [NetBackup のバージョン間の互換性 (Compatibility Between NetBackup Versions)] の順に選択します。

NetBackup のライフサイクル終了のお知らせについて

Cohesity は多種多様なシステム、プラットフォーム、オペレーティングシステム、CPU アーキテクチャ、データベース、アプリケーション、ハードウェアに対し、可能なかぎり優れたデータ保護を提供することに取り組んでおります。Cohesity 社は、今後も NetBackup システムのサポートを見直してまいります。これにより、製品の既存のバージョンの保守と、以下についての新しいサポートの導入とを適切なバランスで行っていくことができます。

- General Availability リリース
- 新しいソフトウェアおよびハードウェアの最新バージョン

■ 新しい NetBackup の機能

Cohesity が新しい機能とシステムのサポートを絶え間なく追加していく一方で、NetBackup のサポートの中には改善、置換、削除が必要なものもあります。これらのサポート処理は、古い、またはあまり使われない機能に影響することがあります。影響を受ける機能には、ソフトウェア、OS、データベース、アプリケーション、ハードウェア、サードパーティ製品との統合に関するサポートが含まれることがあります。また、場合によっては製造元によるサポートが終了しているか、サポート期間終了間際の製品が含まれる場合もあります。

Cohesity 社は NetBackup のさまざまな機能のサポートに変更があった場合でもお客様に支障のないように詳細な通知を提供してサポートいたします。Cohesity 社は、NetBackup の次のリリースでサポートされない古い製品機能、システム、サードパーティ製のソフトウェア製品をリスト化していく予定です。Cohesity 可能であれば、ベリタスによって、メジャーリリースの前に最低 6 カ月で可能なかぎり早くこれらのサポートリストを利用できるようにします。

SORT の利用

今後のプラットフォームおよびライフサイクル終了 (EOL) 情報を含む機能サポートの詳細な通知は、Cohesity Services and Operations Readiness Tools (SORT) for NetBackup のホームページにあるウィジェットから入手できます。SORT for NetBackup のホームページにある [NetBackup のプラットフォームと機能の今後の予定 (Future Platform and Feature Plans)] ウィジェットは、次の場所から直接見つけることができます。

<https://sort.veritas.com/nbufutureplans>

NetBackup のサポート終了 (EOSL) 情報は、次の場所から入手することもできます。

<https://sort.veritas.com/eosl>

p.52 の「[Cohesity Services and Operations Readiness Tools について](#)」を参照してください。

プラットフォーム互換性の変更について

NetBackup 11.2 リリースには、さまざまなシステムのサポートにおける変更も実装されています。SORT の利用に加え、『NetBackup リリースノート』ドキュメントおよび NetBackup の互換性リストを確認してから、NetBackup ソフトウェアをインストールまたはアップグレードする必要があります。

p.10 の「[NetBackup の新しい拡張と変更について](#)」を参照してください。

[NetBackup のすべてのバージョンの互換性リスト](#)

他のNetBackup マニュアル および関連マニュアル

この付録では以下の項目について説明しています。

- [NetBackup の関連マニュアルについて](#)

NetBackup の関連マニュアルについて

Cohesity は、NetBackup ソフトウェアに関連するさまざまなガイドと技術マニュアルをリリースしています。特に指定のないかぎり、NetBackup のマニュアルは「[NetBackup Documentation Landing Page](#)」から PDF 形式でダウンロードするか、HTML 形式で参照できます。

NetBackup が新たにリリースされるたびにすべてのマニュアルが公開されるわけではありません。マニュアルには、NetBackup 11.2 用が公開されていない他バージョンのドキュメントの参照が記載されている場合があります。このような場合は、参照可能な最新バージョンのマニュアルをご覧ください。

メモ: Cohesity は、PDF リーダーソフトウェアのインストールおよび使用に関する責任を負いません。

UNIX に関するすべての内容は、特に指定しないかぎり、Linux プラットフォームにも適用されます。
